九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

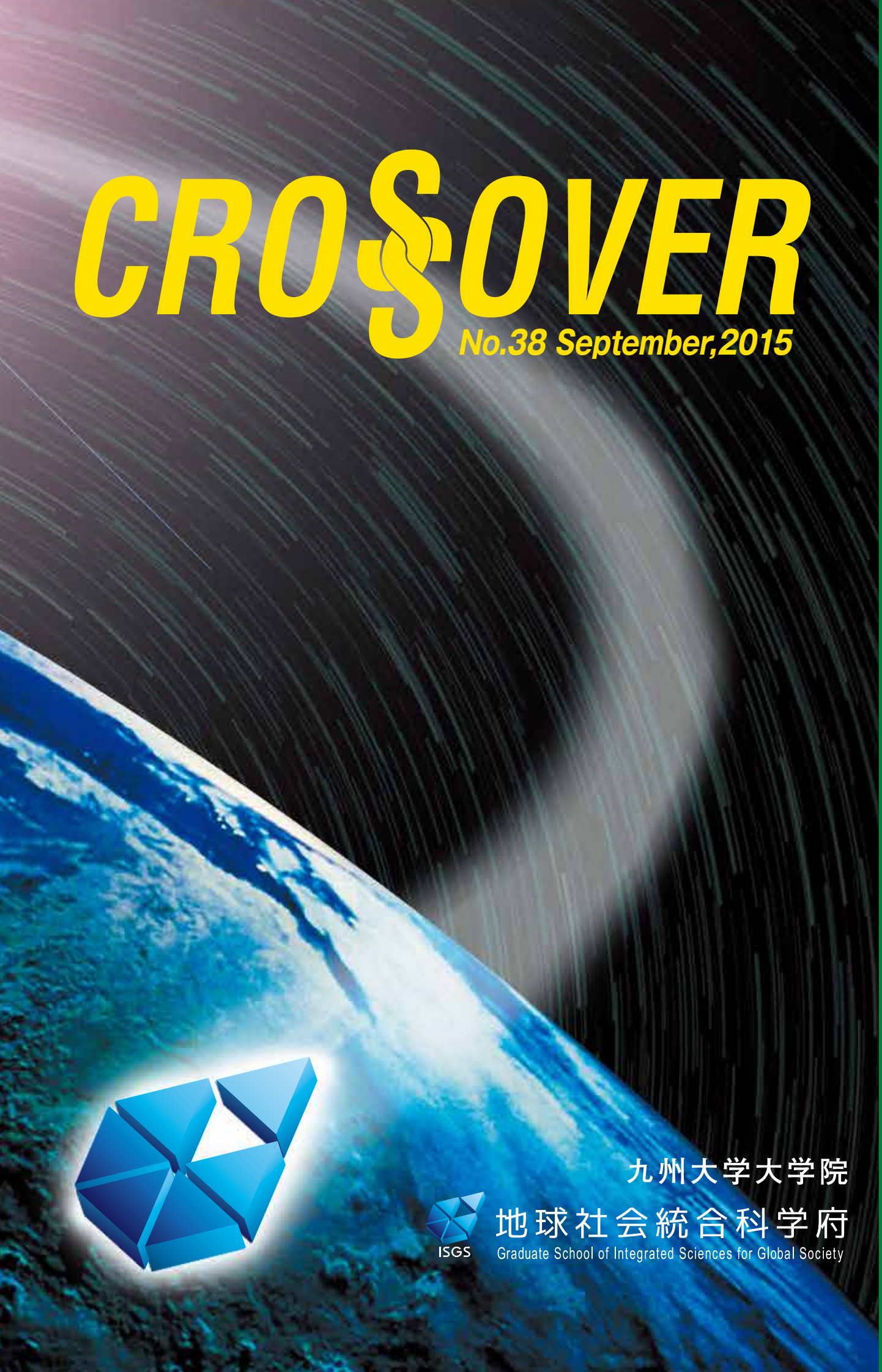
[38] Crossover

https://hdl.handle.net/2324/1906483

出版情報：Crossover. 38, pp.1-, 2015-09. Graduate School of Integrated Science for Global Society, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

CROSSOVER

No.38 September,2015



九州大学大学院

地球社会統合科学府

ISGS

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

Contents

巻頭言

「地球社会的視野に立つ統合的学際性」への第一歩 …… 古谷　嘉章 … 1

田中先生追悼文

田中良之教授のご逝去を悼む …… 溝口　孝司 … 3

プロジェクトレポート

第一回 統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト特別セミナー「東アジア地域協力・地域秩序の未来」 … 地球社会統合科学府グローバル化プロジェクト推進室 … 5

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」2014年度 海外研究者チーム招聘事業… 地球社会統合科学府グローバル化プロジェクト推進室 … 7

International Colloquium on Metamorphic Evolution and Asian Continental Growth 開催報告 …… 小山内　康人・中野　伸彦・笹原　純子 … 10

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」オーストラリア実地調査の報告 …… 鏑木　政彦・マシュー・オーガスティン・林　心泰 … 12

第2回九州大学地球/比文学府・山東大学外国語学院学術研究会を開催して …… 阿部　康久 … 14

リーディングプログラムレポート

フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム平成27年度体験授業報告 …… 17

宇宙開発から村落開発へ …… 森　裕介 … 20

【フューチャーアジアプログラム第1期生】 …… 黄　香淑・張　天奇 … 22

地球社会統合科学セミナー報告

第9回地球社会統合科学セミナー「社会のための地球科学」開催報告 …… 中野　伸彦 … 23

博士後期課程を振り返ってみて …… S.M.ディヌーシャ　ランブクピティヤ … 25

博士論文を書き終えて

博士論文を書き終えて …… 季　江静 … 28

つねに「なぜか」を問い、最善を尽くす …… 祝　利 … 29

博士になった昆虫少年の徒然話 …… 藤井　智久 … 30

九州の南から …… 石田　智子 … 32

大学院データブック …… 33

表紙の説明

ロゴマークは、「地球社会統合学府」の6つのコースを表わしています。すなわち「地球社会統合学府」そのものです。本学府の理念にある「現場主義の精神」、「フィールドワークによって諸問題を究明する」姿を、ロゴマークが地球規模の遥かなる未知の領域へと飛び立つ姿、または、地球と地域をリードしていく姿の象徴として表現しています。

「地球社会的視野に立つ統合的学際性」への第一歩

古　谷　嘉　章
（地球社会統合科学府　学府長）

地球社会統合科学府を代表して一言ご挨拶を申し上げます。地球社会統合科学府に本日入学なさった皆さん、おめでとうございます。私たち教職員一同、皆さんの研究生活がより良いものとなるように最大限の協力をする覚悟です。

ところで皆さん、今回九州大学のこの学府に入学が決まって、周りの方に「九州大学の大学院に進学する」とお話したと思います。そこでおそらく、「どこの学府?」とか、「どこの学部?」と聞かれたと思います。その時にスラスラ言えた人がどれほどいらっしゃるか判りませんけれども、「地球社会統合科学府というところに入学する」と聞いての周りの方々の反応はどうだったでしょうか?「あ、あの有名な地球社会統合科学府、良かったね」と言われた人は、おそらくほとんどいらっしゃらなかったと思います。と申しますのも、1年前に出来たばかりで、本日ようやく1歳になったばかりの学府ですので、これから有名になっていくとはいえ、今の段階ではご存知の方は少ないと思います。その時に周りの方々は、ちょっとどうしていいのか判らなくて、「あ、何を勉強するの?」と質問を変えたりして、それに対して皆さんは「歴史学」とか「生物学」とかそういうふうに答えたと思うのですね。そうすると相手の方は「あ、生物学!」と、ようやく安心できるところに辿り着いたという感じで、「生物学を勉強するんだ。どういうことを勉強するの?」という話になったと思います。

皆さんはこの地球社会統合科学府という、何かよく判らない名前の所で宙ぶらりんだった感じが、自分が研究する学問の名前に辿り着いたところで安心して、そこに自分の居所があるのだという感じを持ったかもしれません。ただこの安心感が罠であるということをここで申し上げたいのです。確かに研究の方法というのは、ディシプリン（専門分野）のなかで教わることができますし、また論文を書いていくとか、あるいはこれから研究者となって就職していくときにも、「何々学をしている」というのは安心できる、判りやすい。この学問の中さえ解っておけばよいというような、これは非常に大きな誘惑なわけです。

ところがこの誘惑にはまってしまうと、せっかく訳の判らない名前の学府に入った旨みと言いますかメリットが極端に下がるわけです。なぜかと言いますと、例えば生物学を勉強したいと思ったら、理学部や農学部の大学院に入ったほうが先生たちも沢山いるし、似たことをやっている同級生や先輩も沢山いる。つまり特定の学問にすっぽり嵌まることを望むならば、近い専門で構成された大学院に進学するのが有利なわけです。しかし折角この学府に入ったのですから、この学府の特性をハンディキャップにするのではなくて、アドバンテージに、つまり有利な状況にしていく努力をしていってほしいと思います。

地球社会統合科学府という名称は耳慣れないので、「地球社会を統合するのですか?」と尋ねる人もいますが、地球社会を統合するわけではありません。私たちの学府のモットーは、「地球社会的視野に立つ統合的学際性」というものです。これはいっぺんに言うのが難しいだけではなくて、判りにくいですよね。どうすれば良いのでしょうか。

「地球社会的視野に立つ」というと、なんか難しそうで、国際宇宙ステーション（ISS）から見なければいけないのですかと思う人もいるかもしれません。必ずしもそういうことではありません。私たちは常にやはり自分中心で考えますので、他の人の立場から世界を見るのは非常に難しいわけです。それに対して、「地球社会的視野に立つ」というのは、まずは、自分とは違う人の所から見たら世界がどう見えるのか、そういう自覚を持つということです。違う人は地球の反対側にいる可能性もありますし、今、隣に座っている可能性もあります。「隣に座っている人の目から見たら、自分が見る世界とは違った見え方をしているのではないか」、ちょっとそういうことを考えてみるだけで、地球社会的視野への一歩が踏み出せるわけです。

統合的学際性の方も同じで、この学府には非常に色々な学問をしようとする学生がいますし、色々な専門分野の先生方がいます。そういう隣にいる学生や先生に自分の研究を説明しようとして欲しいのです。つまり例えば生物学の学生同士で話し合うというのではなくて、隣に座っている文学をやろうと思っている人に、自分のやろうと思っている生物学の研究をどうやって説明できるのか。こうした努力を通して、統合的学際性という、つまり自分のディシプリンと他の人のディシプリンとの

○○○ 入学式式辞

間で何ができるのかという方向へ踏み出せるわけです。

このように「地球社会的視野に立つ統合的学際性」というのは、たいそうなことではなく、「隣の人の立場に立って見てみる」、あるいは「隣の人に自分のやることをちゃんと説明してみよう」、そういう努力をすることであり、そのためには、私たちの学府は、ハンディキャップがあるどころか、アドバンテージがある環境なのです。非常にたくさんの違ったことをやっている人たちがいる、その人たちにどうやって自分の興味の持っていることを伝えられるか、まずそういう第一歩を踏み出していただきたい。

先ほど言った、「自分の学問分野に収まってしまう誘惑」というのは、非常に甘い誘惑なので、それに陥ることなく、折角のこの環境を生かす方向へと進んでいただきたいと思います。そうすることによって、他の大学の大学院、九州大学の中でも他の学府に入学したのでは出来なかったような斬新な研究を皆さんが成し遂げ、それを修士論文・博士論文にまとめることができるとするならば、こんなに嬉しいことはありません。

皆さんが入学したこの学府はまだ2学年しかいません。皆さんがここでしかできないどのような研究をしていくのか、どのような研究成果をこれから5年、10年かけて仕上げていくのか、ということがすなわち地球社会統合科学府なのです。つまり、地球社会統合科学府というものが皆さんの外側のどこかにあって、それに何かをしてもらおうと考えないでください。自分たちの研究を通して、この地球社会統合科学府というまだまだ知られていない、今はまだ皆が「それ何?」というような学府を、「あ、あの素晴らしい成果が沢山上がっている地球社会統合科学府なのですか」と言われるようにしていただきたい。それを可能にするのは、ほかならぬ皆さん自身なのだということをお伝えして、学府長としての挨拶としたいと思います。あらためて、本日は入学おめでとうございます。

田中良之教授のご逝去を悼む

溝　口　孝　司

田中先生のご逝去から四ヶ月あまりが過ぎたが、先生がこの世を去られたという実感はいまだにわかない。こんなとき田中さん（ご生前そのように呼ばせていただいていたので、以下そのように呼ばせていただくことをお許しいただきたい）ならどう考えられるだろう、どのような判断を下されるだろうか、そんなことをふと思うとき、脳裏には田中さんのおりおりの表情とたたずまいが浮かんでいる。

田中さんは考古学という学問の先端を一貫して走られた。学生時代以来の縄文時代研究、医学部解剖学第二講座助手に着任されたことを直接の契機として開始された広義の骨考古学的研究、そこで携わられた遺跡出土人骨の発掘調査、記録、記載、分析、報告のサイクルを基盤として生み出され、発展・体系化された先史時代親族組織の復元とその歴史的変遷過程の研究・先史時代葬送儀礼の研究・弥生時代の開始と展開のメカニズムの研究、また、弥生時代人骨のAMS年代測定結果の精緻かつ批判的運用と厳密な考古学的資料批判を合体させた弥生時代絶対年代論、そして、それらすべての総合としての、縄文時代から古代初期にいたる日本列島史の考古学的歴史叙述。これらすべてについて田中さんは、驚くべきことにそれぞれの研究の先端を前進させ、その後の研究の方向性を規定する成果をあげた。言い換えれば、着手した研究領域すべてについて、田中さんは新たなパラダイム（≒「研究専門母型」）をつくってしまったのだ。これは誇張ではない。事実である。

金井東裏人骨の室内検出作業（2013年7月）

この空前の偉業（「大げさだ、やめろ」と微笑む田中さんの表情を脳裏に浮かべつつ、あえてこう表現させていただくことにする）の背後には、考古学という学問の科学性と、それを徹底することの社会的責任についての重い認識があった。その一端は、いわゆる旧石器ねつ造事件にともない引き起こされた「聖嶽（ひじりだき）洞窟」事件（cf.　日本考古学協会ホームページ「聖嶽遺跡問題」http://archaeology.jp/hijiridaki/index.htm　2015年7月13日アクセス）という悲劇を前にして、高倉洋彰氏（現日本考古学協会会長）とともに中心となって日本考古学協会聖嶽問題連絡小委員会を立ち上げ、徹底した資料批判（調査過程の再現的検討、資料記載・資料保存の実態の再現的再検討、それらをとりまく当時の学会状況・研究環境・社会環境の再現的検討、発掘調査資料・遺物の再実見・再検討）により、「絶対的に実証可能な事実、すなわち聖嶽遺跡調査と報告にねつ造が絶対に介在しなかったと断定する根拠はないが、ねつ造が介在したと断定する根拠は絶対的に存在しない」（溝口のパラフレーズ、直接引用ではない）という結論を導かれたことに、最もよくあらわれていると思う。「聖嶽問題」に関する調査・検証については、教育目的のために院生にその具体的経緯を語られることはあったが、そこに介在したであろう個人的感慨について田中さんは寡黙であった。

そのような確信と、なによりも自ら先端を実践・実現される「所作」に基づく院生の教育・トレーニングは、とても厳しいものであった。しかし、それは田中さん独特のウイットとユーモアに包まれていた。院生に対して優しさを見せることに田中さんはシャイであったと思うが、厳しい指導にふらつきながらもくじけずついてゆく院生たちには、それを理解する能力が自然にはぐくまれていった。そこには、ある種感動的な時間と空間の共有があった（また「大げさだ、やめろ」と、前よりも語調をつよめ、苦笑する田中さんを脳裏に浮かべつつ）。よい修士論文、博士論文が書かれ、よい研究を推進するよい人材が育ち、巣立っていった。

○○○ 田中先生追悼文

博士論文公開審査にて（2014年2月）

今はない六本松キャンパス本館の六階東北隅の基層構造講座研究室での大濠花火大会見物、福岡城本丸での花見、ドームに繰り出してのホークスの応援、毎木曜日の総合演習のあとの飲み会、どれも本当に楽しかった。

よきことを実現することを当然のこととして実行・実現する田中さんの原則（としかいいようがないものが厳然として存在した）は、田中さんが携わられるすべての仕事を激務にした。比較社会文化研究院副研究院長をながく務められ、研究院長任期中には六本松キャンパスから伊都キャンパスへの移転もあった。21世紀COEプログラム人文系『東アジアと日本:交流と変容』サブリーダーとして、語られざる幾多の難局を乗り越えられた。日本考古学協会運営委員、理事在任中にも多くの案件があり、それらすべてに田中さんはよき結果をもたらした。また、日本考古学協会会長として東日本大震災への対応にあたられ、また、英文機関誌創刊など、日本考古学の国際化の道筋を確立された。ことがなってしまえば、それを享受するわれわれには、普通に「よかった」と思ってしまってよいもののように見えてしまうような普通さで、田中さんはそれらをことごとく実現してしまったけれど、よくよく考えれば、それらはだれにとっても決して「普通」のことではなかったし、田中さんの仕事を近くで知るものにとって、その背後にまったく普通ではない分析の努力と、案件をとりまく人間的事象にかかわる天才的観察・洞察と配慮、そして膨大な下準備の作業があることは自明のことであった。それらをあえて見せられることは少なかったので、激務の「激務さ」を、わたしたちも本当に理解していたわけではなかったと思うけれども。

ご自身の医学的知識によってご病気の重さを認識されてから、田中さんは九州大学の考古学研究・教育に携わるわれわれひとりひとりに、ご自身がこの世を去られて後のことを冷静に語られた。同時に、復帰にむけてのできるかぎりのことを、田中さんらしい冷静かつ体系的なアプローチでリサーチし、決定され、実践された。二度目の入院時に、急性期対応の病院であることからリハビリができないことをくやしがられ、最期を迎えられたホスピスでは、一度だけだけれども、介助を得て、一人で立ち上がられたとうかがった。

私のこころに、涙が、ながれる。田中さん、お許しください。

田中さんはこの世を後にされたけれども、古い言葉の真実さをわたしたちは今、実感していると思う。田中さんはわたしたちのこころの中に、確かに、生きている。

田中さん、わたしたちはがんばりますので、どうか見守ってください。

第一回 統合的学際教育を基盤とする 高度グローバル人材養成プロジェクト特別セミナー 「東アジア地域協力・地域秩序の未来」

高度グローバル人材養成プロジェクト特別セミナーの様子

地球社会統合科学府
グローバル化プロジェクト
推進室

セミナー開催

私たち地球社会統合科学府は、九州大学の中でも特に積極的に国際化を進めています。「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」では、産学官民連携型の教育プログラムを実践する一方、海外から優秀な研究者を招聘し、学生のみなさんに世界を直接感じてもらって、いずれ羽ばたく日のためしっかり備えていただこうとしています。その一環として平成26年12月18日午後、伊都キャンパスの伊都ゲストハウスにて、「第一回特別セミナー東アジア地域協力・地域秩序の未来」を開催いたしました。

セミナーでは、まず小山内康人副学府長が開会の挨拶を行い、本プロジェクトの意義について説明しました。そして香港中文大学のウィリー・ラム教授が“*Prospects for East Asian Regional Cooperation in the Areas of Finance, Trade and Climate Change*”と題する報告を、同大学の北村隆則教授が「東アジアの新しい地域秩序とは?」、国民大学校（韓国）の玄大松教授が「東アジアの地域秩序と領土問題」と題する報告を行いました。

この特別セミナーは、アジア統合に関する最新の研究動向を踏まえ、東アジア地域における地域協力・地域秩序の未来を考えてみようというものでした。この分野に造詣の深い香港中文大学と国民大学校の研究者（北村氏は元外交官）に、中国と韓国、および多様な東アジア地域の問題について異なる観点から説明してもらい、過去の経緯を踏まえながら現在の問題を考察し未来を構想する内容となっています。このセミナーにより、地域や学術分野の枠を超え、日本を含むアジアの将来について改めて再考することができました。

香港中文大学のウィリー・ラム教授

○○○ プロジェクトレポート

最初の報告者は、著名な中国研究者であるウィリー・ラム教授でした。このセッション1は英語で行われ、アンドリュー・ホール准教授が司会を、益尾知佐子准教授がコメンテーターを務めました。

報告では、東アジアにおける日本、韓国、中国の3ヵ国による経済協力が、それぞれの国の繁栄だけではなく、アジア太平洋地域、あるいはそれを超えた地域の安定のためにも欠かせないものであること、しかしながら、日本と韓国の経済的なつながりに外交的な介入を行う北京の取り組みが、ASEANのメンバーだけでなく日中韓の間の財政や貿易の問題をも複雑にしてきたことなどが示されました。

香港中文大学の北村隆則教授

セッション2では、玄大松教授と北村隆則教授が日本語で報告を行いました。司会は鬼丸武士准教授で、コメンテーターは松井康浩教授でした。外務省で長く中国問題に携わってこられた北村教授は、“東アジアの新たな地域秩序とは?”という命題を中心に報告をしました。そして、今後の地域秩序を創っていくために、地域協力の共同の枠組みや共通規範づくりの必要性を指摘し、中国と米国との関係の安定化、ASEANの活用、東アジアの地域主義を先導することの重要性を強調しました。さらに、ラム教授と共鳴するように、中国・韓国・日本の間の関係を長期にわたって改善していくことの大切さを主張しました。

国民大学校の玄大松教授

長く韓国ナショナリズムの研究に携わってこられた玄大松教授は、まず戦後東アジア地域秩序の成立に遡って領土問題が誕生した経緯を整理しました。第二に、領土問題の拡大の原因として、世界政治秩序、地域政治秩序、国際海洋法秩序の変容が折り重なったことを指摘しました。そして最後に、領土問題の解決のため、各国がナショナリズムを超えて、ゼロサム・ゲームからの発想の転換を図ることが必要と主張しました。

発表者と、参加した学生による質疑応答

報告の合間には、アンドリュー・ホール准教授、益尾知佐子准教授、松井康浩教授、鬼丸武士准教授がコメントや問題提起を行い、来場者からも質問が行われ、活発な意見交換が行われました。

中野等教授の閉会の挨拶により、セミナーは盛況のうちに終了しました。

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」2014年度　海外研究者チーム招聘事業

エジンバラ大学チーム　国際コロキウム

地球社会統合科学府
グローバル化プロジェクト
推進室

はじめに

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」における招聘事業では、海外から研究者をユニットとして招聘し、国際セミナーやシンポジウムを開催して、本学府の教育および研究のグローバル化に寄与することを目指しています。

2014年度は、3チーム7名の研究者を招聘し、学生への講義・指導、共同研究、国際コロキウムおよびセミナーの開催、フィールドトリップを実施しました。講義は学府生対象、コロキウムおよびセミナーは学外の方にも対象を広げ、参加者が海外研究者による最先端の講義および講演にふれ国際感覚を涵養する機会となりました。

昨年度招聘した研究者、および、滞在中に行われた講義・セミナーなどの概要を来日時期順にご紹介させて頂きます。

フリンダース大学（オーストラリア）

〔分野:考古学〕
2014年11月、2015年1月
Prof. Claire Smith（考古学科）

滞在中は、本学府の溝口孝司教授と社会考古学に関する共同研究および学生指導を行って頂いたほか、以下の日程で集中講義を実施し、学府生が受講しました。「先住民考古学／Indigenous　Archaeology」と題した講義では、オーストラリア・アボリジニの考古学とその歴史的・社会的背景につき実践例をふまえてSmith教授が講義を行いました。

・集中講義
2014年12月4日、12月5日、2015年1月15日、1月16日、1月29日

○○○ プロジェクトレポート

フリンダース大学クレア・スミス教授と本学府の先生方

集中講義の様子

香港中文大学（香港）・国民大学校（韓国）

〔分野:現代東アジア国際論〕
2014年12月～2015年1月
北村隆則教授（香港中文大学日本学研究所）
Willy Lam教授（香港中文大学中国研究中心）
玄大松教授（国民大学校）

北村隆則教授をチームリーダーとするユニットで、「現代東アジア国際論」と題する集中講義の他、第1回統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト特別セミナー「東アジア地域協力・地域秩序の未来」を開催しました（前の記事を参照）。中国と韓国および東アジア領域における多様な問題について異なる観点から検討・検証を行い、わが国を含むアジアの将来について改めて再考する機会となりました。また、「環境対策を通したアジア統合」をテーマにフィールドトリップを実施し、北九州市環境局および新日鐵住金八幡製鉄所を訪問し、フューチャーアジアプログラム生を含む学府生が参加しました。

・集中講義
　2014年12月6日、12月13日、12月17日、12月20日、2015年1月30日
・フィールドトリップ　2014年12月12日
・セミナー　2014年12月18日

フィールドトリップ　新日鐵住金八幡製鉄所を訪問

特別セミナー「東アジア地域協力・地域秩序の未来」の様子

エジンバラ大学（英国）・カーティン大学（オーストラリア）・コロラド大学（米国）

〔分野:地球科学〕　2015年2月
Prof. Simon Harley（エジンバラ大学　School of GeoSciences）
Prof. Ian Fitzsimons（カーティン大学　Department of Applied Geology）
Prof. Nigel Kelly（コロラド大学　Department of Geological Sciences）

エジンバラ大学のSimon Harley教授を中心として3名の研究者を招聘し、学府生への講義を実施した他、"International Colloquium on Metamorphic Evolution and Asian Continental Growth"と題して国際コロキウムおよびフィールドトリップを行いました（次の記事を参照）。コロキウムでは7ヶ国のアジア各国研究者8名を含む約50名が参加し、超大陸の形成・分裂過程についての先端的研究が紹介され活発な討論が行われました。また、フィールドトリップでは約30名の参加者が地殻深部物質の変成プロセス解析によるアジア大陸形成期の造山運動論の理解について野外観察を体験し、データ取得方法等について学び、熊本・長崎にて現地討論を行いました。

・講義　2015年2月9日～13日
・国際コロキウム　2015年2月14日
・フィールドトリップ　2015年2月15日～17日

国際コロキウムの様子　会場：伊都ゲストハウス

熊本・長崎でのフィールドトリップの様子

おわりに

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」は国際的人材養成、学際的実践力の強化、統合学際教育のグローバルな展開、人類的問題を意識した高度専門的職業人・研究者の育成、研究成果発信と九州大学の国際的認知度向上など、さまざまな目標を掲げています。

今回ご紹介した海外研究者チームの招聘では、海外の著名な研究者による講義やセミナーでの交流などといった通常の大学院教育（正課）の枠を超えた教育の機会を学生に提供し、招聘期間終了後も海外研究者チームとの連携を継続し共同研究・教育を推進することにより、プロジェクトの目標達成に寄与することを期待しています。

2015年度は、5～6月にアリゾナ大学（米国）、7月に華東師範大学（中国）の研究者チームを招聘することが決まっています。昨年度と同様多くの学生の参画を願うとともに、本学府における教育の国際化および学際教育のさらなる高度化の実現を目指していきます。

○○○ プロジェクトレポート

International Colloquium on Metamorphic Evolution and Asian Continental Growth 開催報告

コロキウム組織委員会
小山内康人
中野伸彦
（比較社会文化研究院・地球変動講座）
笹原純子
（グローバル化プロジェクト推進室
テクニカルスタッフ）

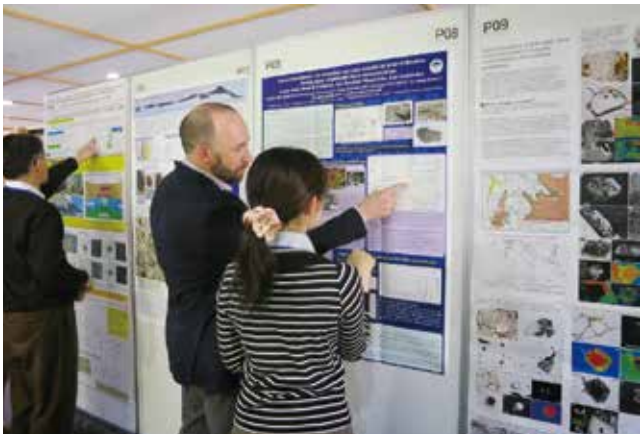
国際コロキウムの開催

2015年2月国際コロキウム「International Colloquium on Metamorphic Evolution and Asian Continental Growth」を開催しました。本コロキウムは2月14日に九州大学伊都ゲストハウスで行われたコロキウム、および2月15日から17日までの熊本～長崎地質巡検から構成されました。コロキウムの趣旨は、本学府で展開中の「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材育成プロジェクト」（以下、高度グローバル人材育成プロジェクト）における海外研究者チームの招聘事業で来日されていたSimon Harley教授・Ian Fitzsimons教授・Nigel Kelly博士をふくめ、アジア各国で活躍する研究者とともに、アジアの地質・テクトニクスを包括的に議論し、研究者の理解を大きく発展させることでした。その受け皿を地球社会統合科学府が担い、本コロキウムと地質巡検を開催することとなりました。コロキウムには、イギリス、アメリカ、オーストラリア、インド、スリランカ、タイ、ミャンマー、インドネシア、モンゴル、韓国、日本の計11ヶ国から42名が出席し、国内参加者も新潟から沖縄まで、広く全国から研究者が九州大学に集いました。

内容

コロキウムでは、口頭発表15件、ポスター発表13件の計28件の研究発表が行われました。多くの発表がアジアに分布する変成岩および火成岩に関する研究であり、それぞれの岩石形成メカニズムやテクトニクスについて、口頭・ポスター関わら

口頭発表会場。発表に集中する参加者たち。



ポスター発表の様子。多くの場で様々な議論が繰り広げられていた。

野外地質巡検時の集合写真。葦北郡芦北町坪木の鼻海岸にて。

ず、熱心な議論が繰り広げられました。このような議論は発表時間にとどまらず、休憩時や懇親会でも常に続いていたように思います。特に、各国研究者が積極的に学生の話に耳を傾け、議論してもらっていたのが印象的でした。

翌15日からの地質巡検では、熊本県・長崎県を訪れました。主要な見所としては、日本列島を構成する岩石の中で最も古くに活動した岩石です。これらは4.5～5億年前に活動したもので、現在は熊本県八代市周辺や長崎県の野茂半島に認められます。もう一つの見所は活火山です。今回は、阿蘇山と雲仙岳を観察する予定でした。著者ら案内者を除く参加者は24名、そのうち半数以上の14名が外国人という国際色豊かな地質巡検となりました。

巡検は阿蘇山のみ前夜の小規模噴火によって観察できませんでしたが（ただし、火山灰は翌朝ホテルで楽しめました）、それ以外の見学地は予定通り観察することができました。私たち案内者から提示した最新のデータに対して、特にアジア人研究者の関心は深く、現地での激しい議論となりました。また、参加者は、岩石だけでなく温泉や日本食に大満足して、無事帰路につきました。

おわりに

著者らは何度かこのような国際シンポジウムや地質巡検を組織したことがありますが、シンポジウムの大小問わず毎回多大な労力を費やします。今回もグローバル化プロジェクト推進室のメンバーや包括的地球科学コースの院生諸氏に様々な場面でサポートいただきました。しかし、今回改めて感じたことは、このような国際コロキウムやセミナーの開催が、大学院生に大きな刺激となり成長への転機になりうるということ。特に今回は、各国のいわゆる「大先生」との議論や今後のコネクションを作るためのすばらしい機会であったと思っています。学生が海外の大きなシンポジウムに参加するのは、経済的に酷なので、今後もこのような国際ミニシンポジウムが本学府主催で開かれ続けることを期待します。

最後に、本コロキウムに使用した経費の一部は、高度グローバル人材育成プロジェクトおよび院長裁量経費によるプロジェクト経費を使用しました。記して感謝申し上げます。

野外地質巡検中の参加者の様子。岩石の組織や構造を観察し、形成メカニズムを議論する。

○○○ プロジェクトレポート

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」オーストラリア実地調査の報告

モナシュ大学の一角

海外実地調査派遣オーストラリアチーム
鏑木政彦
（比較社会文化研究院 文化空間部門）
マシュー・オーガスティン
（比較社会文化研究院 社会情報部門）
林　心泰
（高度グローバル人材養成プロジェクト
テクニカルスタッフ）

モナシュ大学を訪問して

2014年12月、「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」による海外実地調査チーム派遣事業の一環で、モナシュ大学へ訪問いたしました。

モナシュ大学はオーストラリアのメルボルンにある大学です。現在はオーストラリアで最多を誇る約65,000人の学生が在籍しており、そのうち約22,130人が留学生で、国際的な教育を展開しています。また、メルボルンのほか、マレーシアや南アフリカ等に合計8つのキャンパスを抱えていて、オーストラリア有数の大規模な大学と言えます。新学長の就任に伴い、従来のヨーロッパ重視の方針からアジアを中心とした海外展開戦略に転換しつつあり、今回の訪問を通じても、モナシュ大学のアジアの大学に向けての強い関心を実感しました。

部局交流協定について

12月15日、同大学のFaculty of Artsにおいて、部局交流協定に関する打ち合わせが行われました。Faculty of ArtsはGraduate School of Humanities and Social Sciences（GSHSS）、Graduate Research School、Graduate School of Languages, Literatures, Cultures and Linguistics（LLCL）、School of Media, Film and Journalism（MFJ）、School of Philosophical, Historical and International Studies（SOPHIS）、School of Social Sciences（SOSS）、Sir Zelman Cowen School of Music等、多くの大学院の教員から構成されるため、学際的な教育・研究が可能となっています。国際交流等を担当するGroup ManagerのChristine Avenell氏より、モナシュ大学の国際交流の基本方針や学生・学術交流の現状について紹介がありました。また、Professor Jacqui True（Vice-Dean, Faculty of Arts）によるモナシュ大学のBachelor of Global Studiesについての説明があり、部局間交流協定の締結について、前向きな姿勢が示されました。なお、締結に向けて、双方の組織や事務手続きについて互いに情報共有・意見交換を行いました。

打ち合わせ終了後、Professor Jacqui Trueとの記念品交換

意見交換を行って

その後、同大学のOffice of the President and Vice-ChancellorのTrevor Goddard氏（Associate Director）より、モナシュ大学の国際戦略や現在日本の大学と行われている教職員の人事交流について説明がなされました。一方、派遣チームのメンバーは、九州大学のJTWプログラムや地球社会統合科学府について紹介しました。Goddard氏より、今後、両大学の間の交流が活発的になることを期待するとの発言がありました。

翌16日、同大学の学生Jessica O'Leary と教員のErnest Koh先生をはじめとする4名より、International Conference of Undergraduate Research（ICUR）という会議のプラットフォームについて紹介がありました。このプラットフォームは学部生が考案したものであり、会議システムを通じてオーストラリア、アメリカ、マレーシアなどの国にある連携大学の学部生が自分の研究内容を発表し合うイベントを年に1回（9月末）開催しています。説明してくれた関係者からは、九州大学にも参加してほしいとの招待がありました。

ICURについての紹介

続く12月17日から、3回に分けて、SOPHIS のProf. Christina Twomey、Senior LecturerであるAdam Clulow先生と、今回の訪問の主な目的である本学府の「高度グローバル人材養成プロジェクト」における招聘についての協議が行われました。協議を通じて2016年にモナシュ大学から招聘するメンバーが決まり、招聘期間中におけるチームの用務内容や授業の展開方式、シンポジウムの開催等についても打ち合わせが行われました。8回に及ぶ集中講義のテーマもほぼ固まり、「占領と抵抗」、「占領期における経験」、「法律と占領」等、広いフレームワークで「占領」について講義を行う予定について講義を行う予定となりました。

併せて、モナシュ大学より、2015年～2017年のいずれかの年度に、本学府の研究者2名を1週間程度招聘したいとの申し出がありました。モナシュ大学と本学との共同ワークショップを開催するための資金を確保できるよう努力するとの約束をいただきました。

また、訪問期間中、Adam Clulow先生に調整していただいたおかげで、モナシュ大学の遠隔教育システムについて担当者から説明を受けたほか、同大学の日本研究の教員とも意見交換を行い、また、日本研究センター（Japanese Studies Center）を見学させていただきました。

招聘についての協議

全学的な交流へ

モナシュ大学は積極的に教育のグローバル化を展開しており、前述の通り本学府の「高度グローバル人材養成プロジェクト」における共同研究・教育に全面的な協力を約束してくれました。現在、本学法学部などがすでに同大学と部局間交流協定を締結しており、本学府がFaculty of Artsとの部局間交流協定の締結を実現できれば、将来、全学の交流協定に大きくつながることが期待されます。なお、今回の「高度グローバル人材養成プロジェクト」による訪問がきっかけとなって、学部レベルでICURへの九州大学の参画が実現し、9月末の実施に向けて準備作業が進められており、全学的な交流協定の基盤が着実に整いつつあると言えます。

左から、林、オーガスティン先生、モナシュ大学のAdam Clulow先生とErnest Koh 先生、鏑木先生　（文責　林心泰）

○○○ プロジェクトレポート

第2回九州大学地球/比文学府・山東大学外国語学院学術研究会を開催して

写真　伊都ゲストハウスでの研究会

阿部康久
（比較社会文化研究院・社会情報部門）

はじめに

地球/比文学府では、高度グローバル人材養成プロジェクトへの採択にともない、2014年度より山東大学外国語学院との学術交流を行っています。2014年10月には、海外派遣チームの1つとして、報告者を含む本学の4人のスタッフが山東省済南市にある同大学を訪問し、情報収集と第1回学術研究会への出席・報告を行いました（詳細は前号にて御報告させて頂きました）。このような活動を受け、2015年3月26日には、同学院より、劉振前副学院長、邢永鳳日本語学科長、呉松梅准教授をお招きし、九州大学伊都ゲストハウス多目的ホールにて2回目の研究会を開催しました。発表者と発表題目は以下の通りです。

開会の挨拶:秋吉收（九州大学言語文化研究院・地球社会統合科学府）

山下直子（九州大学大学院生）:日本語指導が必要な児童の実態と課題－福岡市立小学校の事例－

張月（九州大学交換留学生・華東師範大学大学院生）中国人留日学生雑誌研究（1900－10）―日本からの影響を中心に―

鍋島有希（九州大学大学院生）:日本企業に就職する外国人留学生に対するエンプロイアビリティ育成の現状と課題

永嶋洋一（九州大学大学院生）:アンケート調査から見る中国朝鮮族の日本語教育の実態

呉松梅（山東大学・外国語学院）:『源氏物語』若菜上巻における明石入道の夢について－漢籍の夢解きの方法から見る－

秋吉收（九州大学言語文化研究院・地球社会統合科学府）：“諷刺家”魯迅の真面目 ―散文詩集『野草』命名論

邢永鳳（山東大学・外国語学院）:趙秩と日本－漢詩文が開いた新たな世界－

講評:劉振前（山東大学・外国語学院副院長）

研究内容

当日は、地球・比文学府の教員・大学院生を中心に30人程度の参加者がありました。また研究会後にはビッグオレンジ・レストランにて懇親会も開催されました。こちらも参加者が20人を超える盛会となり、席上でも発表内容や今後の交流予定について有益な意見交換を行うことができました。今回の研究会の開催に際しては、昨年度の海外派遣チームに参加された秋吉收先生・李暁燕先生のほか、東英寿先生、松永典子先生に多くのご助力を賜りました。加えて、森裕介先生をはじめとするグローバル化推進室の皆様には、先方の先生方の招

聘事務から、当日のプログラムやポスターの作成、会場設営や写真撮影、先生方への対応など、研究会を開催する上で必要な多くの作業を引き受けて下さりました。これらの業務の中には、当方の準備不足により、事前にお願いしていなかったものも多く含まれており、スタッフの皆様からの申し出がなければ、実現できなかったものもあったため、本当に助かりました。加えて、お招きした先生方は、3月29日まで本学に御滞在され、九州大学や福岡に関する情報収集をして頂いたのですが、この際に本学府博士2年生の呉暁良さんが先生方に同行・案内をすることを申し出てくれ、結局、4日間にも渡って先生方と行動をともにしてくれました。今回の交流活動が大学院生の自主的・積極的な協力によって、より実りあるものになったことは、大変素晴らしいことだと思います。

写真　研究会終了後の伊都ゲストハウス前での記念撮影

本学府では、本年度に同学院と学術交流協定を締結する予定になっており、今後とも学術交流を継続していきたいと考えております。関係する先生方・皆様には今後とも御協力を賜りましたら大変ありがたく存じます。以下では、今回の研究会の発表要旨を掲載させて頂きます。

日本語指導が必要な児童の実態と課題
―福岡市立小学校の事例―

山下直子（九州大学大学院生）

アジアの交流拠点都市を目指す福岡市において、外国人労働者及び留学生が増加している。その結果として彼らに随伴された日本語指導が必要な児童（以下、JSL児童）も増加し、日本語および教科学習支援の充実が求められている。その具体的な支援内容を検討するにあたり、まず福岡市立小学校においてワールドルーム（日本語指導のための別教室）とJSL児童の在籍学級で参与観察を行い、その実態を調査した。調査の結果から、①JSL児童は消極的でお客のようである、②授業内容や時間割はワールドルームと在籍学級で分断がみられる、③日本語指導専任教員は日本語指導に関する専門知識の不足から試行錯誤の日々である、④学校の指導体制としてJSL児童への支援だけでなく日本人児童への支援の充実も求められていることが明らかになった。今後のJSL児童への日本語および教科学習支援の充実に向けて、日本語教育の視点からJSL児童にとって学習が困難な項目を明らかにし、支援内容を焦点化する必要があると考える。

中国人日本留学生雑誌研究（1900−10）
―日本からの影響を中心に―

張月（九州大学交換留学生・華東師範大学大学院生）

本研究は、1910年代に出現した中国人留学生雑誌に全体的な考察を加えようとするものである。内容の構成では、まず、留学生雑誌登場の背景に、日本留学運動と両国の出版業界に対して調査整理を行い、当時の中国の雑誌出版界は、日本より約三十年遅れたことを確認した。その次に、留学生雑誌の基本情報を詳細に整理確認し、雑誌社の組織、資金運用、編集者群像、雑誌の構成から、留学生誌は、質量ともに中国国内誌に勝ったという結論に至った。第三に、雑誌の「単行本出版広告」の掲載内容の49.3%は日本書翻訳あるいは重訳となっており、しかも『中国訳日本書総合目録』にないものが104点にもなった。最後に、日本の雑誌と同じ印刷所で印刷されること、日本の会社の広告を掲載すること、装幀、構成、字体などの変化から、留学生誌の形式面での日本からの影響が存在したことを明らかにした。

日本企業に就職する外国人留学生を対象としたエンプロイアビリティ育成の現状と課題

鍋島有希（九州大学大学院生）

日本企業では、社会のグローバル化と労働時人口減少により、外国人留学生を採用する企業が増加しているが、外国人社員には異文化に関連する課題があることが指摘されている。このことから、送り出し側である大学のキャリア教育から外国人留学生に対して、エンプロイアビリティに関する育成支援が必要であると思われる。しかしながら、外国人留学生のキャリア教育の実態が明らかではない。そこで本報告では、福岡県の高等教育機関を対象に外国人留学生を対象としたエンプロイアビリティの育成の現状を調査した。調査の結果、高等教育機関において外国人留学生へのエンプロイアビリティ育成に関する支援は確認されなかった。経済団体や大学組織で構成された非営利組織で実施されていた。事務局へのヒアリングでは、エンプロイアビリティ育成の実態が明らかとなり、外

○○○ プロジェクトレポート

国人留学生に対する職場課題を踏まえたエンプロイアビリティ育成の必要性が示唆された。

アンケート調査から見る中国朝鮮族の日本語教育の実態

永嶋洋一（九州大学大学院生）

世界中に広がりを見せている日本語教育。そこでは、それぞれの国、地域、民族独自の日本語教育が展開されている。本調査は、中国東北地方で最も盛んに日本語教育が行われてきた朝鮮族学校に焦点を当て、これまでの先行研究では明らかにされてこなかった日本語教育の実態に迫るものである。朝鮮族学生112名に対し、アンケート調査を実施した結果、朝鮮族学校独自の日本語教育が見えてきた。朝鮮族学校では、日本語科目が中高一貫で行われており、学校の規定でやむなく日本語を勉強することになった学生が多くいた。また、中学校の段階で、「日本語は勉強しやすい言語」というイメージを持っていながら、高校ではその割合が減り、日本語に難しさを感じている学生も少なくないことがわかった。さらに、日本語の授業は中高ともに「文法」科目が最も多く、「受験日本語」としての側面がうかがえた。これらは朝鮮族学校独自のものであり、今後さらに詳細な考察が必要であると考える。

『源氏物語』若菜上巻における明石入道の夢について ―漢籍の夢解きの方法から見る

呉松梅（山東大学外国語学院）

『源氏物語』に登場している夢の中に、明石の君が生まれる時明石の入道の見た夢は、物語の展開に重要な役割を担っている。この夢に関して古注釈書『花鳥余情』は明石家から皇后と天皇が誕生すると予言する夢であると解している。従来の論は殆どそれを踏まえている。ただし、一族の栄華を予告したこの夢を固く信じ、その実現に一生を賭けた明石の入道が、夢を解読した後すぐ京を離れ明石に下り二度と帰京しなかった行動に、まだ謎が残されている。明石という場所が夢の実現に結びつく必然性を探るため、本論では漢籍の夢の解き方を手がかりにして考えてみた。歴史書、筆記、伝奇などの漢籍にたびたび登場する夢も、将来を予告するような重要な機能を果たしている。漢籍に多く見られる夢解きの方法には、「漢字占い」というのもある。特に予告夢の場合、この方法はより多く使われているようである。同じ漢字の分解、組み合わせの方法は、昔の日本人にも熟知されており、平安時代の日本の文人に詩文に用いられている。「漢字占い」の方法で明石入道の夢を解読するならば、明石入道の夢に隠されている一家の栄華の実現に関わる場所のヒントが解明できる。

“諷刺家”魯迅の真面目―散文詩集『野草』命名論

秋吉收（九州大学言語文化研究院）

魯迅の全著作の中で、直接成仿吾に言及した箇所は約50にも及ぶが、内容は千篇一律、諷刺と非難の繰り言である。文学的、論理的反駁ならまだしも、“罵倒”に終始するのには辟易を覚えるほどだ。「『吶喊』的評論」（1924）を端緒とする確執や、1927-28年を中心とする成仿吾を含む後期創造社と魯迅の激烈な革命文学論争については既に多くの研究がある。だが、本発表で取り上げた、魯迅の散文詩集『野草』と成仿吾の関係については、一切言及されたことはなかった。実は、魯迅は成仿吾が当時の文壇の権威たる文学研究会派の代表詩人や胡適（1891-1962）、周作人（1885-1967）などの詩を徹底的に否定した評論「詩之防禦戦」（1923）を逆手にとって“野草”の語を使用していた。“諷刺家”魯迅の真面目は最高芸術として推戴される『野草』にも十分に発揮されていたのである。発表ではまた、成仿吾が山東大学学長を16年間務めたこと、郭沫若との関係で九州帝大を訪問、福岡にも滞在していたことを紹介した。

趙秩と日本

邢永鳳（山東大学外国語学院）

趙秩は明の外交官であり、正使として日本に派遣され、日本との外交関係を回復するため、様々な面で努力した人物である。彼の努力で中断した中日関係は新たな幕を開けた。そればかりか、趙秩は周防山口・九州の博多に滞在していた間、日本人と付き合い、たくさんの詩文を日本に残している。中日関係における趙秩の役割は検討に値すると考えられる。

本稿では、まず、趙秩の外交交渉の難渋について論じてみたい。また、彼の日本人との詩文の世界における付き合いは、公の場を離れた人間的な暖かい付き合いである、その中から相互尊重の気持ちを読み取ることができる。これらの具体的な事例を通して、かつては日・中・韓の人々が共有していた東アジアの心温まる文化の場を振り返ってみたい。

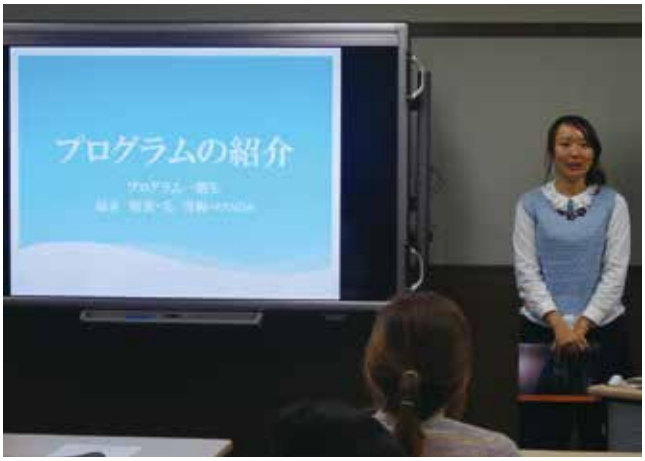
フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム　平成27年度体験授業報告

本プログラムは、産学官民の連携による、地球社会的視野に立つアジア・イノベーション人材の育成を目的とする博士課程教育プログラムです。

平成27年度はこれまでに、プログラムとしては第2期生となる地球社会統合科学府の修士1年の新入生に対してプログラム生募集説明会を開催し、応募のあった10名の学生をプログラム候補生として体験授業を開催しました。

平成27年度プログラム生募集説明会

今年度のプログラム生募集説明会は4月10日に開催し、教職員によるプログラムの説明に加えてプログラム第1期生である平成26年度プログラム生による昨年度一年間の活動紹介を盛り込むことで、新入生がより親近感や臨場感を感じることのできる説明会となりました。



平成26年度プログラム生による活動紹介

今年度は平成26年度プログラム生を対象としたプログラム授業である「フューチャーアジア研究Ⅱ」と「フューチャーアジア連携プロジェクトⅡ」を前期に開講し、その一部を平成27年度プログラム候補生向けの体験授業を兼ねる形で実施しました。以下に今年度に実施した4つの体験授業について紹介します。

○○○ リーディングプログラムレポート

調査インタビュー手法実践ワークショップ

体験授業の第1回目として、昨年はファシリテーションの授業を担当して頂いた株式会社トライローグの平山猛氏による「調査インタビュー手法実践ワークショップ」を5月8日と22日に実施しました。

授業は文化や価値観の異なる相手へのインタビューやコミュニケーションの手法を実践形式のワークショップによって身に付けることを目的として行いました。1日目と2日目の授業の間には学生が実際に身近な社会人の先輩にインタビューを実施する課題を行い、2日目の授業ではそのインタビュー結果を他の学生と共有し、振り返ることを通して、インタビューの手法に対する理解や気づきを深めました。

調査インタビュー手法実践ワークショップ（平山猛氏）

NPO法人東アジア共生文化センター見学

体験授業の第2回目として、5月15日に熊本学園大学を訪問し、申明直教授によるフェアトレードやソーシャルビジネスに関する講義の受講や、学内で運営されている「東アジア共生Book-Cafe」の見学、および同カフェやNPO法人東アジア共生文化センターの運営に携わっている学生による活動紹介やプログラム生との意見交換を行いました。

この授業では、フェアトレードやソーシャルビジネスに関して、その理念・概念や仕組みを理解するとともに、実際にNPO活動に携わっている学生との意見交換を通して、学業と並行して社会貢献活動をすることの意義やその難しさなどについてプログラム生や候補生が知見を得ることができる貴重な機会となりました。

NPO法人東アジア共生文化センター見学（申明直教授）

国連ハビタット福岡本部訪問

体験授業の第3回目として、6月5日に国連ハビタット福岡本部を訪問し、国際機関である国連ハビタットがアジアの課題についてどのように課題解決を図っているのかについて、授業を行いました。

この授業では実際にアジアの現地で支援事業に携わっているSenior Human Settlements OfficerのBruno Dercon氏に講師を務めて頂き、アジアにおける都市問題の現状や国連ハビタットの実際の活動内容について実体験を踏まえた講義を実施して頂きました。

講義後は講師と学生による英語での質疑応答も行われ、国際的な雰囲気に満ちた授業となりました。

国連ハビタット福岡本部訪問（Bruno Dercon氏）

アジアの都市間競争と都市のチャレンジ

平成27年度最後の体験授業として、公益財団法人福岡アジア都市研究所の天野宏欣氏による「アジアの都市間競争と都市のチャレンジ」に関する授業を6月12日と19日に行いました。1日目は福岡市スタートアップカフェにて、起業・創業を促進するための都市空間のデザインと、福岡市や台湾、北京などにおける現状についての講義を行いました。また、2日目にはオープンデータを活用した新たなビジネスの創出についてシンガポール、香港、台北、福岡などを例にとって講義が行われました。

この授業ではNPO法人や国際機関の活動に続いて、起業という新たな側面からアジアの実情を紹介することで、学生が将来のグローバルな活動について多面的な視点を得ることができる機会となりました。

アジアの都市間競争と都市のチャレンジ（天野宏欣氏）

【平成27年度フューチャーアジアプログラム体験授業】

講義名	講師（敬称略）	キーワード	開講日
調査インタビュー 手法実践ワークショップ	平山　猛 （株式会社トライローグ）	インタビュー、 コミュニケーション	2015/ 5/8, 22
NPO法人東アジア共生 文化センター見学	申　明直 （熊本学園大学）	東アジア共生、フェアトレード、 ソーシャルビジネス、NPO活動	2015/ 5/15
国連ハビタット福岡本部訪問	Bruno　Dercon （国連ハビタット）	国際連合、国連ハビタット、 まちづくり	2015/ 6/5
アジアの都市間競争と 都市のチャレンジ	天野　宏欣 （公益財団法人福岡アジア都市研究所）	オープンデータ、社会事業、 起業、都市経済	2015/ 6/12,19

宇宙開発から村落開発へ

イランのアフガン難民インターン達

森　裕介
（フューチャーアジア創生を先導する
統合学際型リーダープログラム）

2002年3月に大学院の工学研究科を修了した私が最初に従事した仕事は人工衛星の熱設計・熱解析の業務でした。高度約36,000kmの静止軌道上に浮かぶ人工衛星を取り囲む宇宙空間は無重力、真空、絶対零度（実際は−270℃）に加えて様々な放射線に直接曝される極限環境です。しかしながら、真空状態における熱伝達は電磁波を介する放射伝熱に限られるため、状況はむしろシンプルです。系としての平均温度はあくまで衛星が受け取る電磁波（主に太陽・地球からの可視光と赤外線）のエネルギーと衛星の放射する電磁波（主に通信電波と赤外線）のエネルギーバランスによって決まり、これは宇宙空間に存在する独立した物体である地球の温暖化についても同じ原理で考えることができます。
宇宙工学で難しいのはむしろ一度打ち上げてしまえば修理することがほぼ不可能なことであり、そのために地上で宇宙空間を模擬した真空チェンバーによる熱真空試験と呼ばれるハードウェアのテストを行ったり、CADを使った精巧な解析モデルによる数値シミュレーションを行ったりします。そうやって何年もかけて開発した衛星を実際に打ち上げ、軌道に投入された衛星から降りてきた各部の温度情報から衛星の置かれた状態を把握し、設計どおりに動作していることを確認できたときは感動もひとしおでした。

一方で、私がエンジニアとしての業務に明け暮れている間、世界では色々な出来事がありました。大学院在学中に発生した9.11同時多発テロを発端とするアフガニスタン紛争やそれに続くイラク戦争、そしてその背後にあったアメリカの軍産複合体。翻って自分の置かれた環境を省みたときに、改めて自分のしていること、これからすることの意義をもっと広い視野から理解しておきたい、またもっと純粋に紛争のない平和な世界を実現する方法はないのか真剣に考えてみたいという思いに動かされ、4年半務めたエンジニアの仕事を退職し、平和学を学ぶためにイギリスの大学院に留学しました。

イギリスでは平和学や紛争解決学の一般的な理論に加えて中東やアフリカの地域紛争などについて学びましたが、やはり知識だけではなく、実際に紛争や貧困の現場での活動を通して現実を理解したいと思うようになり、大学院修了後はヨルダンにおける3ヶ月間のパレスチナ難民支援のインターンを経て、国際協力のNGOに就職しました。

ヨルダンのペトラ遺跡にて

NGOに就職して最初に従事したのは世界の最貧困地域であるサブサハラ・アフリカの国、マラウイでの村落開発プロジェクトでした。当時途上国での活動経験のなかった私がマラウイに関して持っていたイメージと言えば、恒常的な食糧不足に加えて蔓延するHIV/AIDSやマラリアなどの感染症により、国民の平均年齢は50歳に満たず、毎年数え切れないぐらいの子供たちが亡くなっている悲惨な国、という漠然としたものでした。ところが、実際に現地に赴任した私を待っていたのは村人達の笑顔と、雄大な自然と暖かい気候に包まれてゆったりとした時間を過ごすなんとものどかな村の風景でした。

マラウイでは停電や断水、電話がつながらないなどは日常茶飯事、ガソリンスタンドに燃料が来れば長蛇の列、という生活上の苦労に加えて、要求するだけで協力しない村人にワークショップの度に日当や茶菓子を要求してくる参加者や役人など「援助慣れ」した人々、さらにまったく守られない契約や期限、集合時間など、日本では経験したことのない困難の連続でした。

そんな逆境だらけの状況を通して身に付けたのは、自分に達成すべき目標があり、それを実現するための過程で直面しているのが現在の状況であるなら、むしろその現実を知ることで乗り越えるべき課題が明確になることは前進だと思う姿勢でした。その姿勢はその後の人生に大きく役に立っていると思います。

マラウイの村での水道建設

3年半を過ごしたマラウイから帰国後、約1年間の日本での勤務を経て次はイランの首都テヘランに赴任し、そこに居住するアフガニスタン難民支援のプロジェクトに従事しました。日本も加わっている経済制裁下のイランでは銀行を通した外国送金が実施できないため、事業資金を日本から現金で持ち込んだり、外国人として常に現地政府の監視を受けながら過ごすなど、マラウイとは異なる苦労を味わいました。

自分の生まれた国で過ごしているのに様々な制約を受ける、自分の「祖国」に帰りたくても帰れない、だからといって他の国に行くこともできない、という2世・3世のアフガニスタン難民の若者たちの抱える苦悩は大きく、それでも笑顔で前向きに暮らす彼らに対して尊敬の念を抱くとともに、日本で生まれ、自由に国境を越えて行動する自分を申し訳なくすら感じました。

これらの経験を通して学んだのは、例え文化や慣習、価値観の違いはあったとしても、どこの国のどんな人であれ、みな自分と同じように日々悩みながらも日常を生きているのだという当たり前のことでした。本当のグローバル化というのは、自分と世界中の人々との間に何も根本的な違いはないのだということを肌で感じることから始まるのだと思います。

パレスチナ・ガザ地区の農家支援

【フューチャーアジアプログラム第1期生】

黄　香淑
地球社会統合科学府
社会的多様性共存コース
修士2年

中国吉林省延辺朝鮮族自治州の出身です。現在は社会学を専攻し、在韓中国出稼ぎ朝鮮族の老後問題について研究しています。本研究を通じて、外国人労働者の老後生活におけるリスクを明確にし、その対策を探ることにつなげたいと考えています。

学部時代はソーシャルワーカーについて学び、実際にフィールド調査を行い、シミュレーションなどをすることが多かったです。しかし、私は内省的な性格で、人見知りが激しく、人の前で話すことが苦手なので、苦労してきました。そこで、修士課程に入学した際、フューチャーアジアプログラムが目指している「6つの力」(「統合学際力」、「専門調査研究力」、「歩く力」、「伝える力」、「率いる力」、「描く力」)を身につけ、自分を成長させるためのチャレンジをしようと思いました。プログラムの授業では、現場で働く方々からのお話が聞けるし、実際に人の前で発言する機会も多いので、豊富な経験をさせていただいていると思います。

今後は、プログラムの授業や研修に積極的に参加しながら、身につけた知識を研究課題に取り組むために活かそうと思っています。そして、その研究を通じてまとめたものが、他の地域の外国人労働者研究にも役に立てばと、思っています。

張　天奇
Graduate School of Integrated
Sciences for Global Society
Social Diversity& Coexistence Course,M2

Hello! This is Panda.

I'm a second-year master student and my specialty area is gender and sexuality studies. Now I'm working on my papers about how younger Japanese people perceive male homosexuality.

I'm still remembering how thrilled I was when I was chosen as one of the Future Asia Program's candidates. Yet, a suggestion from my professor and a friend turned out to be right, the program is awesome. In the past semesters I have experienced a variety of courses that were completely different from what one can get through traditional seminars held in Japanese colleges. It was also a fun learning process. The lectures covered different fields, and I was able to do things that I had never dreamt about: conducting an orchestra, facilitating a meeting, working out a project with my teammates. All these activities granted me a chance to see things from different angles, and have taught me how to be more open-minded to diverse ideas and cooperate with different people. Through this journey, I have also met many successful people who come from various backgrounds but have been devoting themselves to making a better Asia. Having heard their stories I am inspired and seem to have a clearer clue about what to do in the future.

This March, along with other members from the program, I made an exciting trip to Malaysia and witnessed fascinating and picturesque biodiversity. Following this, with the grant provided by the program I also managed to go to a couple of conferences and events on queer/GSD (gender and sexual diversity) issues in and outside Japan, which has not only paved a way to my further exploration in my study but also given me a chance to meet many like-minded people.

So, if you are also willing to challenge yourself or if you want to start your journey through interdisplinarity to the diversity of the world, this program is definitely a good starting point.

第9回地球社会統合科学セミナー「社会のための地球科学」開催報告

中　野　伸　彦
（包括的地球科学コース）
（比較社会文化研究院）

「地球深部から大気圏まで、地球46億年の軌跡を包括的に科学する」、私たちがコースの紹介などで使用するいわゆるキャッチフレーズである。コース内での専門は多岐におよぶが、ある意味で私たちは、このキャッチフレーズの基、日々研究・教育活動を行っている。その過程で、地球の進化やそれに連動する生命進化の話をするとよく出てくる返し文句がある。「ロマン」や「神秘」などといった言葉。このような言葉や上記したキャッチフレーズは、私たちの日常生活からほど遠く、おおよそ関係のないものである。では、私たちの研究分野である地球科学が、現代社会においてどのような意味を持つのか?また、現在どのような役割を果たしているのか?その問に答えるべく、本セミナー「社会のための地球科学」を企画し、2015年1月24日伊都ゲストハウスにて開催した。

本セミナーは、 6つのテーマ「大規模噴火と市民生活」「活断層地震の社会への影響」「犯罪捜査と地球科学」「環境汚染と地球科学」「古気候学と環境変動」「地球科学の応用と最先端考古学」からなる。前半4テーマは、外部機関から5名の講師の先生を招き、現代社会における地球科学の役割についてお話し頂いた。後半2テーマは、地球科学分野が荷担する学際融合研究の紹介・成果発表を頂いた。発表に先立ち、小山内副学府長から本学府が進める統合的学際性に基づく研究・教育についての紹介と前述したような本セミナーの趣旨説明が行われ、セミナーが開会した。

まず、鹿児島大学・井村隆介先生に「カルデラ巨大噴火のリスク評価とリスク管理」というタイトルで発表頂いた。井村先生は、メディアにもたびたび出演し、火山学者という立場から川内原発再稼働に慎重な姿勢をしめしている。井村先生の話は、九州における過去の巨大カルデラを形成した噴火の実態およびそれらから推定できる今後の危険地域とその対応についてであった。特に、過去の阿蘇山の噴火では、九州～山口が300度を越える火山灰で覆われ、死の世界になったという事実に参加者は震撼した。

次に、「火山災害史研究の重要性」というタイトルで、都城市教育委員会の桒畑光博先生に発表頂いた。桒畑先生は、遺跡中から火山災害の痕跡を見出し、人類史における火山災害の実態を研究している。桒畑先生によると、このような火山災害史の研究は、ハザードマップの作成などに非常に有益な情報を与えるという。また、火山災害発生後、再度人類活動が再開するまでの時間を定量的に見積もることができ、これらの研究成果は、現代においても災害復興という観点から重要であるようだ。

災害の話はまだ続く。次は（独）産業技術総合研究所・宮

セミナー前半。小山内先生（左上）、井村先生（右上）、桒畑先生（左下）、宮下先生（右下）。

○○○ 地球社会統合科学セミナー報告

下由香里先生に「警固断層帯調査研究の最前線」というタイトルで発表頂いた。宮下先生は活断層の専門家であり、福岡県西方沖地震以降、警固断層帯の研究に尽力している。宮下先生による最新の研究成果は、福岡に住む人間にとって中身の濃いものであり、皆の危機意識がより一層高くなったに違いない。また、都市部の活断層研究の困難さに関する話も興味を引いた。断層位置の特定には通常ボーリング調査を行うが、建物の密集する都市では困難である。加えて、断層を発見する(してしまう)と地価の暴落など様々な利害が生じる。一部の人とはいえ、危機意識の低さに愕然としてしまった。

次は一転「犯罪の証拠資料と地質学の関係」というタイトルで、科学警察研究所・杉田律子先生にお話し頂いた。杉田先生は、日本では唯一の法地質学者として、日々犯罪と向き合い、犯罪の物証と天然物の対比を行うことで、物証の出自を解明している。発表は、日本では一般的ではない法科学としての法地質学の解説から始まった。例えば、土砂は母材(岩石)・形成過程(気候・降水・地形など)・生物(土壌化するのに関わった微生物の種類)などの違いなどにより、場所によって色や成分などが異なる。犯罪捜査にこれを利用するというのだ。発表後半の実際の事例紹介も興味を引いた。

招待者の最後は、明治コンサルタント(株)・佐藤尚弘先生に発表頂いた。タイトルは「土壌・地下水汚染への地球科学的アプローチ」。佐藤先生は、地質コンサルタントとしてこれまで様々な業務に関わってきている。地質コンサルタントとは、地球科学分野において最も日常生活に関わる業種であり、例えば、高速道路や空港、ダムの建設などでは必ず地質調査を行い、多くの場合地質コンサルタントが受け持つ。今回の佐藤先生の話では、土壌や地下水汚染の原因究明や対策においても地質学が重要だということ。地下水の流路や方向は、帯水層ごとに異なる場合があり、汚染の対策や原因究明には地質学に基づく地下の地質構造推定が必要不可欠だという。

本学府・狩野彰宏先生の発表「気候変動は人類活動に影響をもたらすか」では、石筍を用いた気候変動の復元とその変動が中国王朝の栄枯盛衰に対応するらしい?という興味深い話が、田尻義了先生の「考古学資料に対する地球科学の応用展開」では、地球科学的手法に基づく最先端考古学の成果が発表された。両発表とも地球科学的解析が人類史の解明につながるという地球科学分野の新たな展開を示唆するものであった。最後に鏑木教務学生委員長のまとめの挨拶により、本セミナーは閉会した。

本セミナーの参加者は50名であった。参加者は、近隣大学を含めた大学関係者のみではなく、公務員やマスコミ、地質コンサルタント関係の参加者もみられた。専門分野も職種も異なる参加者が本セミナーを終えてどのように感じたかは、私には到底分からない。少なくとも私は、災害についてお話し頂いた井村先生・桒畑先生・宮下先生から「過去の災害は私たちの想像より遙かに大きいこと。その認識が災害時により良い行動となる」ということを感じた。また、杉田先生・佐藤先生の話しの中では「多様な地球科学的業務をこなせる若手の育成の必要性」という言葉が印象的だった。狩野先生・田尻先生の話では、「今後の地球科学の新展開」に心躍った。本セミナーでは、近年何かと騒がれることの多い自然災害、凶悪犯罪、環境汚染に深く地球科学が貢献しているという誇らしさを感じると同時に、大学教員として本セミナーで学んだような“社会に直結した地球科学”を学生に「伝える」「教育する」ことの重要性を痛感した。

セミナー後半。杉田先生(左上)、佐藤先生(右上)、狩野先生(左下)、田尻先生(右下)。

博士後期課程を振り返ってみて

S.M.ディヌーシャ　ランブクピティヤ
（九州大学　比較社会文化研究院　特別研究者）

はじめに

私は、信州大学大学院言語文化専攻修士課程を修了した後、2012年4月から九州大学比較社会文化学府博士課程に在籍し、2015年3月、博士号を取得しました。本稿では、博士後期課程での3年間を振り返り、お世話になった方々に感謝を述べると同時に、これから博士課程に進学される方々、あるいは既に博士課程に在籍されている方々にメッセージを送りたいと思います。

研究の土台

この度、幸運にも博士号を取得することができましたが、私が理想と考える博士論文には程遠く、研究に関する私の知識についても満足できるレベルには達しているとは言えません。しかし、それでも研究を形として博士論文にまとめて提出でき、学位を授与された背景には、研究とは何か、どのように進めるものかといった研究の基礎となるものが私の中で築かれていたからだと思います。研究に関する基本知識や研究に取り組む姿勢を育ててくださった信州大学の沖裕子先生はじめ、坂口和寛先生、山田健三先生、花崎美紀先生、内藤哲雄先生、白井純先生、渡邊秀夫先生、船津和幸先生などの多くの先生方には心から感謝しております。先生方の教えてくださった大切な事柄一つ一つが私の博士課程の土台を形作ったのであり、これこそが、研究には最も重要なものであると言えるでしょう。

博士課程における計画

私は、博士課程を有意義に過ごす秘訣は、「計画」にあると思います。「計画」と言ってしまえば、簡単に聞こえますが、博士課程の3年間における計画作成ほど重要なものはありません。特に、3年で博士課程を終えたいと考える人文系の学生にとって、詳細に練った計画は重要です。留学生の場合、日本語のネイティブチェックが不可欠であることを考えますと、ますます綿密に計画を立てて取り組むことが求められます。

私は、博士課程を大きく二期に分け、一期では学会での発表や論文の投稿に全力で取り組み、二期では博士論文の執筆に専念しました。とはいえ、一期においても少しずつ論文執筆を進め、二期においても、学会での発表の機会を逃さないようにしました。その結果、博士課程に所属していた3年間で、査読付きの雑誌に4本の論文が掲載され、日本国内で行われた学会で7回発表することができました。掲載論文のうち、日本語教育の分野では最も知名度のある学術雑誌『日本語教育』誌に私の論文が掲載されたことは、大変誇りに思っております。また、7回の学会発表のうち、博士論文の研究内容と直接関係のない分野についても2回の発表ができたことは、研究を進めていく中で、広い視野を持つことができるようになったからだと自負しております。

2015年3月25日、指導教員の松永先生と博士号授与式にて。

私の視野が大きく広がり、様々なことに関する知識を得ることができるようになったのは、博士課程に編入後、指導教員になってくださった松永典子先生のおかげです。松永典子先生は、地域における日本語ボランティア教室、福岡市西区の小中学校における外国につながりを持つ児童の教育、外国人児童に必要な翻訳などの様々な活動に関わる機会を与えてくださいました。私は、これらの様々な活動を通して、異文化理解・多文化共生・日本語教育などの様々なことについて学び、実体験をすることができて、研究者としてだけでなく、人間としても大きく成長できたと実感しております。

○○○ 地球社会統合科学セミナー報告

他にも、博士課程に所属している間、私に生きがいや自信をもたらしてくれた活動は、福岡県内における小中学校、ボランティア団体などの様々な場において、ゲスト講師として講演や発表を行ったことです。私は、博士課程に所属していた3年の間に12回以上の講演や発表を行いました。

博士論文執筆と同時に論文の投稿、報告書におけるレポートの作成（共同執筆も含めて8本以上）、学会での発表、他のボランティア活動など多くのことを続けられたのは、冒頭で述べた通りの具体的かつ綿密な「計画」を立てて、行動したからです。まず、論文の場合は、研究の内容、調査や調査方法、章間の流れや繋がりなどの全てのことを考慮に入れ、細かい章立てを構想しました。また、博士論文の最後の追い込みの頃は、一つの章の中でもどの部分をどの日までに終わらせるかということまで詳細な計画を組みました。3年間にわたる大局的な計画では、どの学会の発表にいつ申し込むか、その要旨をいつまでに完成するか、原稿をいつ提出するか、いつ発表を行い、いつまでにその内容をまとめて、投稿するかなど具体的に計画を練りました。

このように、時間をかけて入念に計画を練ることで、3年間で博士論文を書き上げることができました。私は、博士課程を通して身を持って知った計画を立て実行することの重要性を、後に続く方のために、ここで特に強調したいと思います。

多文化関係学会石井米雄奨励賞の受賞

上述した活動のうち、私と、私がかかわっていた九州大学伊都キャンパスで行われている留学生の家族のための日本語ボランティア教室について特に記したいと思います。松永典子先生のご指導をいただき、この教室を対象に調査を行って、私は、多文化関係学会2014年度第13回年次大会において、「『多文化共生社会』を目指した日本語教室―日本語ネイティブとノンネイティブチームによる取り組みを中心に―」という題で発表しました。その結果、多文化関係学会年次大会における石井米雄奨励賞をいただくことができました。授賞式は今年度11月の年次大会のときに行われる予定です。

多文化関係学会のニュースレター第26号（2015年2月）に筆者の発表が石井米雄賞を受賞したと掲載されている様子

現在、日本も含めて世界全体では、多様な文化的背景をもった人々が共生する「多文化社会」ができています。そのような社会において、地域性、民族性、宗教、言語、ジェンダー、職業、世代など、社会を構成する人々の広い意味での文化的相違のために思わぬ軋轢・摩擦が起きています。「多文化関係学会」は、このような問題の背後にある諸要因を究明し、多様な文化の相互作用およびその関係性を、多面的かつ動的に研究し、今後の教育・実践に活かす学会です。そのため、アジア太平洋地域との比較文化研究や日本国内の多文化についての研究を重視し、日本人の異文化接触をめぐる諸問題に言語、コミュニケーション、心理、教育、ビジネス、環境、交流史などを切り口として、多面的にアプローチしています。当学会における石井米雄奨励賞は、年次大会終了後審査委員会が開かれ、申請書、研究発表抄録、そして研究発表等に基づき、慎重な審議の結果選出される若手研究者に、当該研究の成果や発展性などを総合的に評価し、奨励として与えられる賞です。

第13回年次大会において私が行った発表は、具体的には次のような内容です。即ち、留学生の家族のための日本語教室に参加している日本語学習者と運営側の大学院生（九州大学伊都キャンパスの日本人学生と留学生両方を含む）を中心にアンケート調査とフォローアップインタビューを行い、本教室を通して両参加者がどのように互いの関係性に築いているかについて調査しました。その結果、両方の参加者が留学生の家族のための日本語教室は互いの学び合いの場、友好関係や交流に気づく場として捉えていることが明らかとなり、そのことから、本教室は多文化共生社会における小さなモデルであることを提言しました。この受賞は、博士課程の中で私が得た大きな成果の一つであり、このような栄誉をいただけるまでに私を導いてくださった松永典子先生には本当に感謝しております。

留学生の家族のための日本語教室での活動。
（写真左から2番目、筆者）。

博士課程での様々な支え

博士課程における3年間、私を支えてくださった方々はお名前を一人一人挙げられないほど多くいらっしゃいます。偶然出会って、数分しか話していない方にも、博士論文執筆に関してお願いをすることがありました。これらのことを通して感じたことは、一期一会ということです。どんなに小さな出会いでも大事にしなければなりません。私たちは、いつ、どこで、誰に助けてもらうようになるかわからないのだから、どの出会いも大切にするべきです。

これらの方々と同時に、博士課程における困難を乗り越えるためのパワーを私に与えてくれたのは、「博士課程とは自分一人でどうにかなるものではない」という言葉です。この言葉は、私が博士課程に進学したいと相談したときに、大阪大学出身でいらっしゃる私の高校時代の日本語の先生がおっしゃった言葉ですが、同様の内容を様々な方々に言われました。この言葉はまさに真実でした。まずは、調査協力者の協力がないと調査が成り立たちません。ゼミ、学会などの場で先生方、先輩、後輩、同級生、参加者などからいただいたコメントやご意見が研究の方向性を決めたり、不備に気づかせてくれたり、自分一人で解決できない研究の悩みを解決してくれたりします。また、留学生の場合、日本語で書いたものを日本人にネイティブチェックしていただかねばなりません。さらに、予備審査、公開審査などを含め、指導教員団の先生方のご苦労は筆舌に尽くしがたいです。また、忘れてはならないのは、大学院係をはじめ事務の方々の協力です。このように、博士課程では自分の力だけでは進まないことを実感しました。博士課程に進学する際に、こうしたことが理解できていれば、先生方、先輩、後輩、同級生との付き合いや接し方に大きな違いが出てくるでしょう。この紙面において、博士課程でお世話になった東洋大学三宅和子先生、九州大学の松永典子先生（主査）、松村瑞子先生、志水俊広先生、李相穆先生に感謝の意を表したいと思います。

博士論文の執筆は、辛く、困難なことでありますが、NHKの朝ドラ「花子とアン」の主人公、花子の「曲がり角を曲がった先にはきっといいものが待っているに違いない」という言葉が、私にその辛さに堪えられる力を与えてくれました。私は、この言葉を自分に言い聞かせながら博士課程と博士論文を頑張りました。

信州大学の修士課程に所属している間、中西彩乃先輩に言われた言葉も私の頭の中で響いていました。「修論は終わるものではない、終えるもんだ」と言う言葉です。博士論文の問題点が出てくるたびに、あれもこれもと新しく調べたくなって収拾がつかなくなりそうなとき、私はこの言葉を自分に言い聞かせて、自らをコントロールしながら執筆を続けていきました。「あなたは最後になってから一気に論文を書けるようなタイプではない。最初から少しずつ書いていったほうがいい」、「君の論文を読む私のことも考えてください」とは、修士のときの信州大学の先生方に言われたことです。博士課程の終盤には、筋が通った論文を仕上げなければなりませんが、信州大学の先生方にいただいた言葉通り、私は早い時期から少しずつ論文を執筆していきました。また、留学生である私の日本語を読んでくださる先生のことを考え、どんなときも日本語のネイティブチェックを受けてから先生に提出するようにしました。日本語のチェックをお願いするときも、その方々の負担を軽減したいと考え、章を分けて複数名の方々にお願いしたり、提出日より早い時期にチェックをお願いしたりするなどの様々な工夫を行いました。このように、私は日本での研究生活を通して、多くの方々から直接助けられたばかりでなく、言葉という形で長く、そして力強く支えてもらいました。

おわりに

3年前九州大学比較社会文化学府に編入したときの私と比較しますと、私は今やっと研究者としてスタートラインに立つことができたと思っています。これからも支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、自信を持って研究に励んでいきたい、社会に貢献していきたいと思っています。

最後に、本誌にこのような文章を書く機会をいただけたことに、心から感謝を表します。学位取得から3か月経過した現在、博士課程のこの3年間をあらためて振り返ることで、新たな人生をスタートするための勇気と力を与えられたように思うからです。

博士論文を書き終えて

季　江　静
（比較社会文化研究院・日本社会文化専攻）

2015年3月31日、私は多くの方々のサポートを受けて、博士号の学位を授与して頂きました。

テーマは、依頼に対する「断り」のストラテジーの日中対照研究です。そもそも、私がこのテーマで研究を始めたきっかけは、修士のころの来日経験によるものです。即ち、中国で学んだ日本語教科書におけるモデル会話と自然談話にはギャップがあり、特に依頼に対する「断り」のストラテジーに関する内容が不十分であると実感したのです。そこで半年間の研究生生活を経て、2011年4月、九州大学大学院比較社会文化学府に入学し、前述したテーマで、本格的に研究に取り組むことにしました。

博士論文を書くにあたって、いろいろな苦労もあり、また時には落ち込むこともあり、「産みの苦しみ」のようなものを強く感じました。そこで、博論執筆に関する状況や経験を、この場を借りて報告させていただきます。院生のみなさんの参考になれば幸いです。

● 比較社会文化学府の「学際化」

比文に入学して、博士後期課程の世話人である松永典子先生の「多文化関係論」・「語学教育実戦演習」・「日本語教育論」という授業を受けたことから、異なる背景を持つ学生と交流するようになり、自分の日本語に関する知識や日本語教育経験も豊富になって、視野が広がっていきました。また、松村瑞子先生の「日本語対照言語学」、志水俊広先生の「第二言語習得論」という授業を通して、自分の研究に関わる理論を多様な角度から構築できるようになりました。こうして、研究に関するポライトネス理論・語用論・第二言語習得理論を把握することができたことが、博論執筆に非常に役に立ちました。

● 先行研究を大量に読み、しっかり理解すること

研究を行う上で「先行研究（文献）を読む」という作業は、博論執筆における重要なパートです。なぜなら、先行研究を把握しておかないと独自性のある研究成果を出せないからです。また、文献メモ（自分のテーマに関する部分・重要と思われる記述や分析・文献リストなど）を取ることも大事です。それにより自分の研究がどこに位置づけられるかも分かるようになります。

● 図書館を最大限に活用すること

比文に入学してから、研究に関する本や文献資料の貸し出しの他、他大学などから研究に関する本や論文を取り寄せるサービス、図書館ホームページを介して学術情報を効率よく探すためのデータベースや海外の電子ジャーナルなどの閲覧など、伊都図書館を最大限に活用したことは、博論執筆に役立ちました。

● 余裕を持って博論を完成すること

ワードの機能を十分活用できなかったことや突然パソコンが壊れたことによるデータの再入力作業などで大変苦労しました。このように、博論執筆中には、予想外のことがよく起こります。また、論文を書く時間を毎日確保することは容易なことではありませんでした。どうしてもやる気が出ず精神的に辛い時期もありました。しかし、どんな時でもいつも励まし続けてくださった松永典子先生に深く御礼を申し上げます。そのため、博論完成までには、時間に余裕を持って、着実に一歩一歩進めていくことが大事です。

博士号の取得に至ったのは、未熟な私を最後まで辛抱強くご指導下さった松永典子先生、松村瑞子先生、志水俊広先生、郭俊海先生、藤森弘子先生をはじめ、多くの方々に支えていただいた賜物です。この場を借りて、お世話になった皆様に心より御礼を申し上げます。

最後の松永セミナーにて、松永メンバーとの記念写真
（前列右から3番目は松永先生　前列右から2番目は筆者）

つねに「なぜか」を問い、最善を尽くす

祝　利
（比較社会文化学府　日本社会文化専攻）

平成27年3月25日、先生方々及び周りの多くの友人の励まし及び暖かい見守りを受けて、私は無事に博士学位を取得することができた。修士課程を六本松で送り、キャンパスの移転に伴って博士課程に進学し、伊都キャンパスの建設とともに6年間の道のりであった。

私の研究課題は、今から凡そ80年前の日本統治下の中国東北地域、いわゆる「満洲国」の日本語教育に関するものである。分野から分類すると、この研究は日本語教育史の範疇に入っており、一般の語学研究より、歴史的な色彩が強い。教育史研究の初心者であった私に道を導いていただいたのは有馬学先生の「どんな小さい事でも、つねに『なぜか』を問う」という教示であった。先生の言葉はずっと肝に銘じており、それは私の研究の根本であり、論文の源でもある。例えば、博論の中に「満洲国」の教員養成に関する部分がある。なぜ教員に注目したか。それは先行研究の華北地域の中国人教員と日本人教員との連携事例から、「「満洲国」では?」という疑問に引かれたからである。

教育史研究にとって歴史史料の存在が命であると言っても過言ではない。いかに新しい資料を発見するのかは最も大きな難関であった。「「満洲国」地域で発掘すべき」と思い、修士課程から毎年、中国東北三省の省、市立図書館、大学図書館などを訪問し、資料収集を行った。係員に書庫から一冊一冊の色がすでに褪せた古い本を渡してくれた時の喜びは今でも覚えている。しかしながら、中国での資料取扱政策によって、2011年より、全ての図書館では戦前の資料に閲覧制限がかけられ、本を読むことさえもできなくなっていた。やむを得ず、資料収集の主戦場を日本国内に変更した。九大図書館を通じて、日本国内にある歴史史料を取り寄せ、また、国会国立図書館に訪ねて、資料の複写などを行った。

資料があって、これらの資料をいかに加工して、その輝きを放させるべきか。次に研究方法の問題に遭遇した。一人で考えるのはあくまでも限界があり、躓く時はよくあった。この際、助けの手を差し伸べてくれたのは先生方々、及び周りの友人である。比文の教育の最大の特徴は学際性にあると思う。異なる分野、研究領域の先生方や研究者が集まっており、ゼミだけでなく、普段、研究室内での意見交換や相談などを行うことができ、多角的に問題を解決することができた。

博論を書く過程は、研究力の証左のみでなく、精神的な試練でもあると思う。時間と戦いながら作文する時の孤独さ、考えがうまく纏まらない時の挫折感など、日々は自分自身との苦闘の繰り返しであった。そうした中、研究を諦めようとした時は何十回、何百回もあった。その時、いつも指導教官の松永先生の親身的な指導と暖かい言葉に救われた。発表で「これは研究ではない」と批判されて涙を溢した時の「大丈夫!」、研究から逸らしそうな時の「喝!」、雑誌投稿に受からず落ち込んだ時の「諦めない限り、道が開く」などのように私を激励してくださり、これこそが私が博論を書き続ける原動力であった。また、東先生が修士課程のときから、多くの勉強法、研究方法などを教えてくださった。私の研究机、家の壁には様々なメモ用紙が貼ってある。論文を書きながら浮かび上がったアイデァや問題点などをすぐにメモに記録し、目立つところに貼っておいた。この方法を教えてくださったのは東先生である。益尾先生が政治の面から私の研究視野を広げてくださったほか、先生がアメリカに研究訪問に行かれたにもかかわらず、ハーバード大学から中国では勝利を意味する赤色のシャツを送ってください、励ましてくださった。ホール先生が資料を発見されるたび、私に見せてくださり、研究情報の提供及び分析に多大な力となった。オーガスティン先生が歴史の観点から、私の見逃した問題点を指摘してくださり、研究の方向を示してくださった。その他、私の資料収集、また、日本語校正には、周りの友人に多大な協力をくださって、記して感謝を申し上げたい。

博士論文を書き終えて、今、中国語教育と日本語教育の現場に臨んでいる。今後もつねに「なぜか」を問い、最善を尽くしていきたい。

松永先生(後2)、後輩と台湾にて、
学会発表後の最高の笑顔　(後右1は筆者)

○○○ 博士論文を書き終えて

博士になった昆虫少年の徒然話

藤　井　智　久
（比較社会文化研究院・生物多様性講座）

話は突然に…

博論を書き終えて、はや2ヶ月が経ち、これからどうしようと考えていた頃、私に本コーナーへの執筆依頼が来た。こうした話は初めてのことで、何を書いたら良いのかわからなかった。そこで、私の辿った道を少し振り返り、博論執筆の助言へと話を進めていこうと思う。

私は地元で時間を見つけては好きな虫を捕ることを楽しむ昆虫少年だった。ただし、私は熱烈なマニアではなく、どちらかというと「ライト」な昆虫少年だった。理由は網を振っても珍虫を捕るスキルも根気がないからだ。また、私は採集よりも昆虫をじっと観察するほうが好きだった。私が昆虫学者を志す切掛けになったのが、兵庫県博が主催したボルネオジャングルスクールへの参加だった。私は小学校6年の時にジャングルスクールに参加し、熱帯の森で、昆虫の多様性とその生態に魅了され、昆虫がもつ不思議や謎を紐解く仕事に就ければと夢を描き始めた。最近の話だが、親から自分が使用した学習机の天板に敷いたマットを除けた際に見つけた「**I want to be an insect scholar**」と彫った落書きの写真が送られてきた。しかし、私はいつ頃彫ったかを覚えていない。さて、地元から九州へ旅立って10年過ぎ、昆虫少年も、この春に博士号を取得し、晴れて「**Entomologist** =昆虫学者」になった。ここからは、博士になった昆虫少年の大学院時代の話や博論**Tips**について紹介したい。

研究を始めた切掛けや、虫こぶ、自分の研究について

私が虫こぶと出会ったのは、鹿児島大学の学部1年だ。その秋、同大学で開催された日本昆虫学会第66回大会にて、九州大学の湯川淳一名誉教授と出会った。湯川先生から虫こぶ・タマバエを紹介され、そこから私も虫こぶの形状やタマバエの生態の面白さについて研究したいと思い始めた。さて、時が進み、卒論の頃になると、私は有剣類・アリ類を研究している山根正氣名誉教授の下で、マサキタマバエの虫こぶ形状と幼虫体色の多型について分子系統解析を用いて研究した。大学院に進むあたり、湯川先生から虫こぶ形成性昆虫のタマバチを研究している阿部芳久教授を紹介して頂いたことが、九大に、そして、比文に来る縁となった。私は、修士～博士の間、九州・伊豆地方などで調査し、虫こぶ・タマバエ・寄生蜂を対象にした群集生態、島嶼生物、寄生蜂の寄生戦略など幅広い研究を進めるに至った。

大学院生時代の私

ここからは、比文に入学後に起きた私の物語をダイジェストで振り返りたい。まず、初めに比文に来て面食らったのが学習面での物量が急激に増え、ゼミやセミナーが多く日程も厳しかったことだ。学部とは異なり、週4のゼミに、月1・2回ゼミ発表があるなど、ついていくので一杯一杯だった。入学した当初、私が甘く描いた200%ぐらい盛りに盛った自分の理想像は砂上の楼閣のように崩れさり、ただ呆然と日々を送った頃もあった。出来の悪い自分も博士課程へ進学するにあたり、あの学振に応募した。私の場合は、応募から結果が出るまでに要するなど長期戦だった。1次で「面接候補」→2次で「補欠」→春先に「一転採用」とフルコースを味わった。学振の面接は今でも良く覚えている。待合室に入ると、部屋の中は独特な雰囲気で、重力が2・3倍に、空気の密度が異様に濃く感じ、とにかく息苦しかった。私は面接本番でもガチガチに緊張し、どこか空転した説明になり、年末に届いた通知で補欠に選らばれるなど散々だった。この経験を通して、人生のターニングポイントになるイベントでは、確実に1発で決めきる決定力が必要だと学んだ。誰であれ、重要な場面で決めきれるように日頃から準備しておくことが大切だと思う。私はそういった詰めが甘く決められない性分なのだろう。

図1：タブウスフシタマバエの虫こぶ

博士に進んでも事は順風満帆に運ぶことはなかった。博士課程では、論文や学会発表の数を増やすなど実績を積み、次のキャリアへステップアップできるように目指すのが一般的である。私も自分の研究を論文にして発表するまでの壁が高く、道のりが長かった。「ハラビロクロバチがマサキタマバエを寄主操作して虫こぶの形状を変える」と内容をまとめた論文は、投稿から出版まで**1**年**7**ヶ月ほどの時間を要した。遅筆な私が何とか原稿を共同研究者と完成させ、最初のジャーナルへの投稿に至ったのは**D1**の終わりだ。そこからの1年はエディターリジェクト**6**回・リジェクト**1**回を受け、年が明けてから、やっとこさ、アクセプトへの道が開けてきた。正直、九大の院生でも、私のような長い戦を経験した人は少ないのではないかと思う。また、イヌツゲタマバエと寄生蜂群集を扱った研究でも、解析が進まず長く暗いトンネル中で過ごす時間が長かった。この研究は、イヌツゲタマバエの虫こぶの数が集めやすい伊豆半島・伊豆諸島で調査した。まず、イヌツゲタマバエの寄生蜂群集が伊豆半島からの距離に応じて島ごとに種構成が変わることがすぐにわかった。これは島嶼生物学のセオリー通りの結果で明瞭だった。次ぎに、取り組んだ虫こぶの形質と寄生蜂群集の関係性の解析が暗礁に乗り上げた。データ・パラメーター数が多く、幾つものグラフを作り、その度に統計解析を試みるも失敗の連続だった。時には、データ解析のアイデアも浮かばず逃げていた時期もあった。しばらくして、中南米において寄生蜂群集と標高の関係を調べた論文を、たまたま読んでいた時、まさかとひらめいて、自分のデータに当てはめみることにした。そうすると、イヌツゲタマバエの虫こぶの形質や寄生蜂群集と標高との関連性が示唆された。そこから解析が順調に進み、この研究を何とか博論に含められるようにまでなった。博士での経験から言えるのは、まず、論文が発表されるまでの長い道のりを耐える精神的タフさを身につけておくことだろう。次ぎに日頃から関連分野に留まらず様々な論文を読み、アイデアや、アプローチ、解析手法が自分の研究に生かせないかを考える時間を作ることである。何がどこで役に立つのか本当にわからない。

博論執筆も至難の業

私の博論は、**General Introduction**で包括的にレビューし、本論の3つの章で個別の課題に取り組んだ成果をまとめ、最後の**General Discussion**で博論全体の内容を収束させるものだった。中でも、**General Discussion**が一番難しく、本論の内容は異なる3つの系を扱い、視点も幅広く、これらを収束させるためのアイデアがうまく出てこなかった。そこで、**Google**で「**PhD. Thesis**」「博士論文」と検索し、海外の大学で電子公開された博論や**Tips**サイトから**General Discussion**を書く術を探した。私は、これらを読みながら、自分の博論と照らし合わせて、**General Discussion**のアイデアを練った。この作業は思ったより長引き、**General Discussion**を書くのに1ヶ月ほど費やした。博論は自分がやってきた研究のまとめであり、研究を総括する章が**General Discussion**だと思う。皆さんにも自分の研究をまとめについるような章を設けて、頑張って執筆して欲しい。

博論Tips

私からの博論執筆への助言は少しだけで、基本的にはこれまで本コーナーを担当してきた先輩方が書かれた内容の通りだと思う。博論は、何であれ、書かなければ完成しない。そう、まず勇気を持って、キーボードを叩いて1文字目を入力することから始めよう。自分のことを振り返ると、いきなり、1章もしくは1節を1日で一気呵成に書けなかった。どちらかというと少しずつ書き進めていくスタイルだった。

Tips1: 毎日一定の文字数もしくは単語数を書いたら、今日の執筆時間は終わり!と割り切ろう。

博論を執筆していくなかで、時に思うように筆が進まず、躓くこともあるだろう。私も博論の良いアイデアが出てこない時もあった。そんな時は、しっかりと休養を取って頭を真っ白にリセットして、翌日原稿を見ると意外と執筆と捗った経験がある。

Tips2: 週**1**でリフレッシュタイムもしくは、オフ日を作り、しっかり休養すること!リフレッシュにより、頭の中で、錯綜し、ごちゃごちゃになったロジックやストーリーを整理することができる!

博論執筆で一番の難関は時間との闘いだ。とにかくタイトな日程になる。しかし、往々にして、自分が描いた博論完成への工程は上手く進捗しない。工程の遅れを取り戻そうとすると泥縄に嵌まって、頭が働かず、執筆も進まなくなる。

Tips3: 進捗が予定通り進まなくても焦らない、工程の遅れを取り戻そうと急がない!多少の遅れはよくあることだ!と想定して、心に余裕を持とう!

最後に

私の博論が完成するまで辛抱強く待って下さった阿部先生、楠見先生、三島先生、小野先生（国立科学博）には大変お世話になりました。誠にありがとうございました。研究や論文執筆で叱咤激励して下さった湯川先生（九州大学）、徳田先生（佐賀大）、また所属講座・研究を協力して下さった方々にもこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。最後になりましたが、本コーナーへの執筆を依頼して下さった田尻先生に感謝いたします。

○○○ 博士論文を書き終えて

九州の南から

石　田　智　子
（鹿児島大学）

本年4月から鹿児島大学法文学部の准教授に着任しました。学位取得が決定したのが、ちょうど一年前の6月末日。幸いなことに鹿児島にご縁をいただき、慌しく伊都キャンパスを飛び出してから三ヶ月が過ぎたところです。

九州大学では、学部から大学院、研究員まで、長い時間を過ごしました。研究に没頭し、学問について遠慮なく議論できる仲間と切磋琢磨できる楽しい日々でしたが、先の見えない将来の不安におびえる毎日でもありました。ようやく落ち着ける場所にたどりつけたことで、最近は穏やかに過ごしています。鹿児島は故郷の福岡と雰囲気が似ていることもあり、違和感なく新生活をはじめました。もはや、桜島が見えないと心細く感じるこの頃です。降り積もる火山灰と、梅雨の大雨に慣れるには、もう少し時間がかかりそうですが。

私の専門は考古学です。教える側へと立場は変わりましたが、新たに出会う気付きがたくさんあります。学生はみんな熱心に話を聴いてくれます。反応が直接分かることは今までにない経験で、とても楽しいです。一方で、正確な知識を分かりやすく伝えることの難しさと責任にも直面しています。自分では理解しているつもりでも、うまく言葉にできないことがもどかしく、授業後に反省することも多いです。また、フィールドワークの経験談などの楽しい話は興味を引きつけやすいものの、少し抽象度をあげた話になると学生のモチベーションの維持が難しくなります。表面的な面白さだけでなく、それにともなう苦しさや厳しさを乗り越えて、未知の世界に突き抜けることこそが学びの醍醐味だと私は考えます。考古学の魅力を広く伝えるために、守りに入らず、易きに流れず、最先端の知識を教育にフィードバックできるよう努力します。修練の日々は、これからも続きます。

考古学ゼミ生以外の学生との会話を通して、考古学（者）が身近な存在として認識されていないことを知りました。堅苦しくて難しい学問であるとの印象は、意外でした。行き当たりばったりの「宝探し」イメージも根強いです。考古学の立場からは当然と思うポイントに対して、新鮮な驚きや喜びを感じることも分かりました。このような一般認識を知ることは、専門性が高まるにつれ、視野狭窄に陥っていたことを自覚する契機にもなりました。今までは、興味のおもむくままに知識を得ていましたが、もっと学問体系全体の中に位置づける重要性、現代社会で過去を知る意義を伝える必要性を強く感じます。専攻や将来の職業として考古学を選ばなくても、文化の大切さや次世代に継承する意義を理解し、未来につなげる架け橋になってくれることを願います。そして、多様な選択肢が存在することを伝え、学生の決断の実現をサポートすることが、教員としての自身の役割だと考えています。学生とともに自身も成長できる機会を頂き、とても幸せです。

私はこれまで北部九州地域の弥生社会を対象とした研究を進めてきました。ずっと九州島の北端にいたせいか、今までは北（中国大陸・韓半島）や東（日本海沿岸・瀬戸内海）の方にばかり目を向けてきたように思います。南九州に来たことで、南西諸島や台湾を介した中国大陸との関係、太平洋を介した中四国や近畿との関係など、海を介した交流関係を改めて意識することができ、視野の広がりを実感しています。新たなフィールドや資料に対して、これまで比文で学んできたことをいかに実践できるか、挑戦できる機会が今です。地域研究を越えて、アジアを視野に入れた体系的な研究を進めることで、これまでの研究をより深化するべく精励します。

比文の先生方、仲間たちをはじめとする多くの方との出会いや刺激は、かけがえのない私の財産です。心より感謝申し上げます。これからは鹿児島で、先人から受け継いできた地域の歴史と文化を大切にし、新たな歴史をつくる一端を担うよう努めてまいります。地に足をつけた研究を進めつつ、世界を視野に入れた成果を九州の南から発信します。

新たな心のよりどころ、桜島。

平成26年度博士学位（課程博士）取得者及び論文題目一覧

授与番号	学位の種類	（フリガナ） 氏　　名	専　攻	博　士　論　文　名	授与年月日
比文博甲 第238号	比較社会 文　　化	アオ キ シ ホ コ 青 木 志 穂 子	日本社会 文　　化	近世･近代非母語話者による日本語敬語研究の位置付け ―ロドリゲス、ホフマン、アストン、チェンバレンを中心にして―	2014年 11月30日
比文博甲 第239号	比較社会 文　　化	アラン ブアリブ Allan Bouarib	国際社会 文　　化	The Nature and Function of Images in the Science Fiction Works of Philip K. Dick （フィリップ･K･ディックのSF作品におけるイメージの性質と機能）	2015年 3月25日
比文博甲 第240号	比較社会 文　　化	シュク リ 祝 利	日本社会 文　　化	「満州国」における「民族協和」下の人材養成と日本語教育	2015年 3月25日
比文博甲 第241号	比較社会 文　　化	リュウ キン ボウ 劉 金 宝	日本社会 文　　化	太宰治と中国 ―作品における中国的モチーフについての考察―	2015年 3月25日
比文博甲 第242号	比較社会 文　　化	リ ソウ リュウ 李 双 龍	日本社会 文　　化	The Effects of Social Networks on Wellbeing in China（中国において社会ネットワークが幸福に及ぼす影響）	2015年 3月25日
比文博甲 第243号	比較社会 文　　化	ディヌーシャ ティランガニー ランブクピティヤ Dinusya Thilanganie Rambukpitiya	日本社会 文　　化	スリランカ人日本語学習者に対する感謝表現の指導法開発に向けた基礎研究	2015年 3月25日
比文博甲 第244号	比較社会 文　　化	キ コウ セイ 季 江 静	日本社会 文　　化	依頼に対する「断り」のストラテジーの日中対照研究	2015年 3月31日
比文博甲 第245号	比較社会 文　　化	ヤマ ネ ショウ コ 山 根 祥 子	国際社会 文　　化	日本におけるアルフォンス･ドーデの移入と受容 ―その評価の変遷	2015年 3月31日
比文博甲 第246号	比較社会 文　　化	ハナ オカ オキ フミ 花 岡 興 史	日本社会 文　　化	初期幕藩体制における意思伝達のメカニズム	2015年 3月31日
比文博甲 第247号	理　　学	フジ イ トモ ヒサ 藤 井 智 久	国際社会 文　　化	The influence of modifications in gall characteristics on interactions between gallmidges and their associates （虫えいの形質変化がタマバエとその生物群集との生物間相互作用に与える影響）	2015年 3月31日

平成26年度博士学位（論文博士）取得者及び論文題目一覧

授与番号	学位の種類	（フリガナ） 氏　　名	博　士　論　文　名	授与年月日
比文博乙 第 37 号	比較社会 文　　化	オオ ヤマ トモ ミ 大 山 智 美	戦国大名島津氏の領国支配と権力構造	2015年 3月25日
比文博乙 第 38 号	比較社会 文　　化	ヒガシ ノボル 東 昇	近世の村と地域情報	2015年 3月31日

九州大学

比文・言文研究教育棟

伊都キャンパスセンターゾーン

広報情報化推進委員会よりおしらせ

『クロスオーバー』に寄稿された原稿の著作権は著者が有するものとする。ただし地球社会統合科学府（広報・情報化推進委員会）は広報活動の一環としてそれら著作物をウェブサイト等で公開する権利を保有する。

（2010.10.08 第2回広報情報化推進委員会決定、10.22 学府教授会報告）

編集後記

『CROSSOVER』38号を皆様にお届けします。今年3月には、これまで比較社会文化研究院･学府、地球社会統合科学府を様々な形で牽引されてこられた田中良之先生が志半ばで永眠され、本号に溝口孝司先生より追悼文を寄稿していただきました。この場を借りて、ご冥福をお祈り申し上げます。地球社会統合科学府は2年目を迎え、昨年にも増して学生、教職員の皆様の世界を舞台にしたご活躍が目立ちます。本誌でもそのような取り組みを、ご紹介できたかと思います。今後も皆様の益々のご活躍を祈念して、本誌をお届けします。

最後に、執筆に携わった皆様、広報･情報化推進委員の皆様にお礼申し上げます。

広報・情報化推進委員会　クロスオーバー編集担当　：　田尻義了

SGSのロゴの説明

ISGS

新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調･安全構築」「社会的多様性共存」「言語･メディア･コミュニケーション」「包括的東アジア･日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。

2015年9月
発行

ISGS

GRADUATE SCHOOL OF
Integrated Sciences for Global Society

発 行 者	九州大学大学院地球社会統合科学府
発行年月	2015年９月

〒819-0395　福岡市西区元岡744
TEL：092（802）5786・5787
FAX：092（802）5791
ホームページ：http://isgs.kyushu-u.ac.jp/